

360

203



始



C
123

360-203



想

録

板

本

秋

村

譯

大正

4. 9. 16

内交

序

ルツッオは偉大な哲人で、實に近代文明の先達である。幾多人間の偽善と技巧とを厭ひて、自然に歸れど絶叫したが、その熱烈な雷のやうな獅子吼は、殷々として遙に渾圓球上に轟き、誠に近世の燦然たる文化を齎らしたのだ。彼の思想や、着實簡樸で、深く人心の奥底に觸れ、その文章や、天真流露で、強く人の情緒を穿つてゐる。げにや彼の言説には、何等の虚飾も誇張もなく、亦何等の奇矯もないが、百五十年後の今日、恰も尙ほ警鐘のやうに私等の耳朶に響くものがある。

「瞑想録」はルツッオの絶筆であつて誠に不朽の名著である。彼は眞に「懺悔録」を出してその半生の徑路を述べたが

未だ云ひ盡さない所が頗る多かつた。否、云はうと思つても、その四圍の境遇上、云ひ得ない所、云ふを憚る所甚だ多かつた。「瞑想録」は彼が易簣二個月前迄で執筆したもので、前後六十有七年間、人生のあらゆる艱難や苦楚を嘗め盡くし、あらゆる迫害や凌辱に闕え盡くして、最後の安心と慰安さに到達し、悠々自適しながら誰れ憚る所なく、赤裸々にその云はうと思つたことを述べたのである。

ルツソオは「瞑想録」中に、「懺悔録」を書いた時は過去の記憶が薄らいで忘れた箇所も少なくなかつたので、想像を加へて之れを補つたが、この「瞑想録」に限つては更に想像を交へないで、在りのままの事實を偽りなく書いたのだと云つてゐる。それで「懺悔録」は小説的色彩を帯びてゐるが、「瞑

想録」は眞に偽らない飾らない彼が胸底の赤心を披瀝したものであることが明かである。

歐米の幾多の評論家は、此「瞑想録」を以てルツソオ第一の傑作なりとも近代の最も颯麗な作物であるとも激賞してゐる。「懺悔録」は個々の外部の事件を書いたものだが、「瞑想録」は生涯に於ける内部の出来事、即ち心奥の苦悶と感想とを書いたもので、前者は主として肉の方面を描き、後者は専ら靈の方面を寫したのである。「懺悔録」は過去の苦惱の多い歴史を書いたばかりでまだその離脱の實驗を説く所少かつたが、この「瞑想録」には専ら心の煩悶や憂惱の有様を述べ、之れが離脱と救済との方法や實驗を説いてゐる。噫、惱めるもの、悶ゆるもの、悲しめるものは來つて本

書を讀め。恐るるもの、憤れるもの、不平を懐くものは來つて本書を讀め。本書は實に千古に卓出した哲人が、前後六十有餘年間の人生に於ける心靈の苦闘史である。大思想家が赤裸々なる斷腸の哀史である。淺薄な机上の空理空論ではなく、一字一句悉く血と涙との結晶とも云ふ可き、偉大なる人生哲學書である。本書を讀むものは華やかな一道の光明に接し、楽しい解脱の途上にある清い靈泉を掬するの感があるであらう。そしてその胸に蟠まる凡百の苦みや、惱みや、恐れや、憤りや、悲みは、忽ちに消えうせて、恰も光風霽月に浴するの思があるであらう。

大正四年初秋

榎本秋村識

ルツツオ略傳

ジャン、ジャック、ルツツオは、モンテスキューや、ゾラ、ルテエルと共に、十八世紀に於ける佛蘭西思想界の三傑と稱されてゐた。歐米人はルツツオを目して佛蘭西近代の偉大な哲學者、偉大な散文家と呼んでゐる。我が國でもルツツオと云へば、普通教育を受けたもので知らぬものはない位有名である。

ルツツオは千七百十二年瑞西のセネバに呱呱の聲を上げた。父は時計製造を業としてゐたが亦舞踏の教師をも務めてゐた。ルツツオは不幸にも幼いうちに懐し、親に死に別れたばかりでなく、この父にも棄てられてしまつた。それで天涯地角、身を寄せる所だにない薄倅な孤兒となつて

種々様々な辛苦艱難を嘗めなければならなかつたのだ。

ルツソオは彫刻家の弟子となつた。然しその師匠が日夜苛酷な取扱ひをしたので、遂に辛棒しきれないで、その家を飛び出してしまつた。これは十六の歳であつた。彼の放浪生活は實に此の時から初まつたのだ。浮世の險惡な風浪は遠慮會釋もなく、到る處不幸な彼を苛責した。彼は泣いて旻天に訴へたことが幾度であつたか量り知れなかつた。然し幸にもウアラン夫人の家に引取られて宗教學校に入るこゝが出来た。貧困な父は學校教育すら彼に與へなかつたが、その時他人にも此のやうに情深い人があるかま、感泣せずにはゐられなかつた。彼はこの夫人に救はれる前、殆んど三年の間、所定めぬ放浪の生活を送つてゐたのだ。

天性聰明穎悟な彼の才智は、學校教育を受けて著しく發達した。學校を出てから彼は里昂に赴き、家庭教師となり、音楽を教へたりして生活してゐた。幾許もなく彼は巴里に到つたが、偶々モンテエギユに知られて、ヴェニス駐在佛國公使の書記として伊太利に赴任した。然し外交官の生活は彼に適しなかつたので、數月ならずして任を辭し再びシャンペリーのウアラン夫人の家に寄寓することになつた。

彼は初め法律や哲學などを修めただばかりでなく、思索的な瞑想的な資質をもつてゐたので、種々な卑近な職業に従事しても些の興味をも感じなかつた。それで常に宗教や文學や、哲學などの思索に耽つてゐた。この氣質がいたく

ウアラン夫人の氣に入つて、爾來九年の間夫人から厚い同情を受け、夫人と同居して平和な著作家としての生活を營むことが出来た。特に彼は音樂的天才をもつてゐたので、音樂に興味豊かな夫人と共鳴する所が多かつたのだ。

彼は當時夫人と共に音樂の研究に苦心し音樂に關する一論文を書いて學士院に提出した。その理論は彼が特殊の音樂的發明に基づいたものであつたが、學士院の採用する所とならなかつた。然し彼は更に屈しないで數年の後、「村卜者」を題する歌劇を草して、オペラ座で之れを上場し、多大な喝采を博した。而かも之れが佛國の樂壇を革新する原動力となつたのだ。

その後彼は巴里に出て、ゲテロヤ、アランベルヤ、グラ

ンなどの有名な文人、哲學者と交を結び、潜に文壇に雄飛の基礎を作つた。千七百四十九年、ゲジョンの學士院は懸賞論文を募集した。その論題は「科學及び文藝と風俗との關係」であつた。當時學士院では科學や文藝は風俗に善良な影響を與へるその主旨を論じた一文を期待してゐた。然るに少年時代から巴里を離れた田舎に生活したが文壇や學界の腐敗や墮落を耳にしてゐた彼は、却つて之れを反對に科學文藝の發達は善良な風俗を害する旨を論じた一文を草して學士院に送つた。學士院は彼の論文を見て少なからず驚いた。然し立論が正確で、叙事精彩に富み、一々實例を指摘し、實に古今稀に見る名文であつた。それで賞は彼の有に歸した。彼は科學や文藝を攻撃したので、非難の聲は

瞑想録

四方から起つたが、之れが爲め彼は一時に文豪の列に加は
るこゝが出来た。

彼の名聲は爾來年々共に隆大さなつた。然し彼が忌憚の
ない誇々の議論や主張の爲めに彼を學説を異にした一派の
人々の迫害する所となり、數年の後已むなく瑞西に遁れた。
高き木は風に折られると云ふ諺のやうに、名望高きものは
古來より他の嫉妬や猜忌を受け易いものだ。伊太利のダ
ンテや、西班牙のセルヴァンテスや、その他偉大な天才の
士で、迫害を受けたり酷遇されたりして、不幸な殘年を終
つたものは屈指に遠ない程である。彼も亦この例に洩れな
いで、多くの敵の爲めに種々な辛苦を嘗めたのだ。無情な
敵は到る處薄倖な彼を迫害したので、彼は身を安んずるに

處なく、南奔西走、南船北馬の亡命的生活を爲したが、千
七百六十六年英國に赴き、有名な史家ヒュムの保護を受け
た。彼は之れが爲めに多年の間、筆紙に盡し難い煩悶と不
安との生活を營んだ。然し晩年に至り、敵の迫害も弛んだ
ばかりでなく、悲憤懊惱の極、飄然として悟る所あり、心
に偉大な安心を得、故國に歸つて平和なる晩年を悠々自適
しながら送るこゝが出来た。彼は千七百七十八年六十七歳
で歿したのだ。「瞑想録」は實に當時に於ける精神上の苦悶
の暗黒より、大悟の光明に達した切實な自己の經驗を、あ
りのままに録したものである。誠に「瞑想録」はこの不遇
な偉人が慘憺たる涙の痕である。苦惱の叫びである。解脱
の喜びである。予は「瞑想録」をもつて、彼が第一の傑作と

瞑想録

瞑想録

呼ぶに踴躍しない。

彼の作物として世に知られてゐるものは、この「瞑想録」の外「懺悔録」や、「エミール」や、「社會契約」や、「山嶽」の書翰」や、「對話録」や、「ジュリエ」やがある。彼が全集は十八冊になつてゐるが、「瞑想録」位眞摯で高雅繊細なものは殆んど他に見當らないと思ふ。

ソルツ
瞑想録 目次

第一

- 孤立の地位
- 夢のやうな既住
- 惨酷な迫害者
- 想像の不幸
- 運命の服従
- 心の靜平
- 浮世の毀譽
- 自己の研究
- 懺悔録と對話録

第二

- 想像力の衰凋
- 銷魂の歡喜

目次

目次

- モニル・モンタンの逍遙
- 植物の採集
- 意外の災難
- 蘇生の感覺
- 妻の驚愕
- 悲しい憶測
- 某夫人の來訪
- 謝絶の書翰
- 逝去の噂
- 原稿の豫約出版
- 解脱の泉源

第三

- 老の研究
- 幼年時代の回顧
- 青年時代の希望

四

- 虚飾物の排斥
- 心身の改革
- 哲學者との爭論
- 困惑の迷宮
- 確乎不拔な主義
- 迫害者の道德
- 晩年の事業

第四

- アルタークの愛讀
- 少年時代の虚言
- 虚言の研究
- 眞實の解釋
- 嘘の種類
- モンテスキウの小説
- 誠實な人

八

目次

目次

若い娘の間
二十年以上隠くした秘密
非行と徳行
學問には年齢がない

第五

風光明媚なサン、ビエル島
最も幸福な生活
楽しい草花の採取
快心な午後の運動
兎の飼養
湖水に浮べた小舟
瞑想の快樂
羽化登仙の思
心の避難所

第六

跛足の少年
慈善の快樂
束縛の鎖
慈善の研究
多感多恨の性質
時代の變化
艱難の偉力
運命の弄
宇宙一げいの生存
ジゼエノ指輪
人間の自由

第七

老後の偉大な覺悟
不思議な一事
瞑想と反省

目次

一九四

一三五

一六三

目次

人間第一の幸福者

自然の三調和

美しい自然

植物と薬劑

礦物界と動物界

趣味裕かな研究

學者の功名争ひ

瑞西の山野

アルノアルの冒險

第八

肉體の逸樂

人生の風浪

心の糧

暗黒界の平和

輕佻な時世

三三

世の批判の標準
肉の傷と火の傷
自尊心の征服
無上な慰安法
慘酷な争闘
氣質の兩面

第九

快樂の光に綻ぶ心

セオフラン夫人の讃辭

子供の愛撫

孤兒院の子

天真爛漫な舉動

桶屋の子

小娘と蒸餅

シユヴレットの祝ひ

三三

目次

目次

巴里と端西の遊び
廢病院の逍遙
一錢の舟賃
親切の賣物

第十……………三三

ヴァラン夫人との對面

夫人との幸福な生活

生き甲斐のある月日

心の形式

田園生活の快美

附録

ルツソオ傳略……………一

ルツソオ 瞑想錄 目次終

ルツソオ 瞑想錄

榎本恒太郎譯



孤立の地位——夢のやうな既往——慘酷な迫害者——想像の不幸——運命の服従——心の靜平——浮世の毀譽——自己の研究——
懺悔錄と對話錄

私は此の世界に唯だ一人で、自分といふものゝ外に、もはや兄弟もなければ隣人もなく、友もなければ、交はる人もも

瞑想錄

たない。人一倍交際好きで、最も愛嬌ある自分は、云ひ合せたやうに交りを断たれてしまった。私を憎い憎いと思つてゐた人々は、何うしたならば過敏な私の心を、最も慘酷に苦しめることが出来やうかと、いろ／＼に穿鑿をした。彼等は私の執着してゐた凡ての羈絆を、無理無体に破つてしまった。しかし例令どんな妨害を受けても、私は依然として人々を愛したのである。彼等が私の息の根を止めなければ、到底私の愛情を奪ふことが出来なかつたのだ。私にとつて、彼等は今や關係のない、あかの他人である。知らない人である。これで彼等の望みどほりになつたのだ。私は彼等や凡てのものから離れて、獨りだちになつたが、しかし私といふものは、一体何であらうか。私の今研究しやうとするのはこれである。

不本意ではあるが、この研究を始める前に、自分の地位を一瞥する必要がある。彼等から離れて自分に立戻するには是非かうしなければならぬ。

私は十五年以上も、此のやうな並ならぬ地位にゐたのだが、尙ほこれを思へば夢のやうである。一種の消化不良が私を苦しめ、碌々安眠することも出来なかつたが、再び友の居るのを見出して、其の苦痛も知らず、眼を醒したのだと私は思ふ。疑もなく私は何とはなしに、覺醒から睡眠に、否、寧ろ生から死に一と飛びに越すべきであつた。その譯が解らないが、私は常規を逸して、何物も見分けのつかない不可解な混沌界に墜落したやうであつた。そして自分の現在の地位は愚か、何處に自分があるかをすら考へなかつた。

嗚呼私は自分を待つてゐた運命を何うして豫知することが出来やうぞ。かうして生きてゐる今日あることを、何うして思惟することが出来やうぞ。このもとのまゝな私が、少しの疑もなく、自分を怪物や、毒殺者や、暗殺者と看做されたり、人類の敵や、細民の玩弄物となつたり、通行者の嘲笑を受けたり、時代の凡ての人々が云ひ合せたやうに、自分を生きながら葬ることを快とする日があるであらうとは、どうして衷心から想像することが出来やうぞ。この並ならない革命が不意に起つたとき、私は初め甚だしく驚いた。私は激昂と憤怒とのために、殆んど氣を失つたやうになつて、その波立つた憤激した心を押鎮めるに、約十年の星霜を費した。この間、誤謬に誤謬を重ね、過失に過失を重ね、愚昧に愚昧を重ね

ね、輕卒にも私の運命の指揮者たる迫害者等に、種々な材料を與へた。彼等は永久に私の運命を定めるために、巧みに之を利用したのだ。

私は永い間、激しく力抗したけれど無益であつた。方便も策略も用ゐないし、矯飾や細慮なこともせず、公明正大に、氣短かに憤つて論争してみたが、却つて益々自分を壓迫し、斷えず新しい攻撃の手掛りを與へるばかりであつた。私は自分の凡ての努力が少しも効がなく、徒らに自分を苦しめるばかりであると悟つたので、もう必然な避け難いことには反抗しないで、自分の運命に潔よく服従することにした。一旦かう決心すると、私の心が靜かになつて、これまでの凡ての不幸も償はれ、無益な苦しい反抗などを全くしなくなつた。

私の心をこのやうに静かにするに、與つて力あつたものは他に一つあつた。迫害者等は憎い憎いと思つてゐながら忘れてゐた。それは追々迫害の度を増して、常に或る新しい打撃を與へ、斷えず私を悲しませることだ。彼等が巧に或る希望の光を私にのぞかせてゐたならば、尙ほ引續いて私を苦しめることが出来たのだ。或る偽りの罪で私をおもちやにし、偽りの期待で常に私に新しい苦悶を與へることが出来たのだ。しかし彼等は既に凡ての手段を用ゐ盡してしまつたので自ら身を引いたのだ。彼等から受けた誹毀や壓迫や、嘲弄や侮辱やは、私にもう何の痛痒を感じさせない。これ等を増す彼等も、減する私も共に均しく常規を逸してゐる。彼等は下界のあらゆる詭計を施し、人力の極度を盡して、私の不幸を最高

點に達せしめやうと努めたのだ。それで肉体の悲哀が、私の苦痛を増すよりは寧ろ慰安となつた。私から悲哀を取り去つて、恐らく憂悶を遠ざけたのである。即ち私の肉体の苦惱は、精神の苦惱を止めるのだ。

凡てのことが爲し盡されてしまつたから、私はもう彼等を恐れるにあたるまい。彼等はこれ以上私を不幸にすることが出来ないから、もう私を驚かすことも出来まい。不安と恐怖とから私は永遠に解放されたのだ。これが私にとつて常に一つの慰安だ。もう物質上の不幸は私を苦しめるに至らない。私は自分が試みた不幸には容易く味方するけれど、自分の恐れる不幸には味方をせぬ。私の恐れ戦く想像は、これ等の不幸を結び付けたら、裏返しゝたり、擴げたり増したりする。不

幸が今来るか今来るかと期待してゐるのは、目の前に不幸が現はれるより百倍も私を苦しめる。威嚇は實際の打撃よりも遙に恐ろしい。不幸が到来するや否や、想像が取除かれて、その不幸の眞價が現はれる。私は實際の不幸が豫め心で想像したよりも、一層小さいことを知つた。且つ苦んでゐる最中には慰安を感ずることが出来ない。凡ての新しい恐怖や、不安や、希望から脱して、唯だ習癖の力によつてのみ、こんな悪い境地を一日一日と、日を追ふて堪へ忍ぶやうになつたのである。感情は時間に鈍らされるに従つて不幸は最早再び感情を呼び起す手段とはならない。迫害者等が、過度にその怨を用ゐ盡したので、それが却つて私の利益になつたのである。もう彼等は私にとつて、何の權威もないのだ。そしてそ

れから後、私は彼等を愚弄することが出来る。

私の心が靜平に立戻つてから未だ二ヶ月とはならない。久しい前から私は何ものをも恐れないが、しかし尙ほ希望を懐いてゐた。この希望は時に盈虚があつたが、之がため幾百千の雑多の感情は私を斷えず激昂せしめた。然るに意外の悲しい一つの出来事が起つて、遂に私の心から、この弱い希望の光をも消してしまつた。そして此の世に於て永久に定まつた自分の運命を私は悟つたのである。これ以來私は全く身を天運に任せて、再び平和を得たのだ。

私は運命をあからさまに一瞥するや否や、再び自分の爲めに公衆と共に生活しやうとする考を失つた。且つこのやうに以前に立戻つて生活することは、最早相互的でないから、今

後は全く無益なことである。人々が私のもとに立歸らうとするのは徒勞である。もう二度と私を見出すことが出来ない。彼等は私を輕侮してゐるから、彼等と交際するのは無意義で、寧ろ迷惑である。それで私は彼等と共に生活するよりも、自分獨り居るのは百倍も幸福である。彼等は社交のあらゆる歡樂を私の心から根こぎにしてしまった。それで私の一生中には、もう再び芽を萌すことが出来まい。餘りに遅く過ぎたのだ。この後、彼等の爲すことは、善惡ともに全く私に頓着がない。私に對して例令何事を爲すとも、當世の人々は私にとつて没交渉である。

しかし私は尙ほ未來を考へた。そして今よりも勝ぐれた後世の子孫が、一層よく吟味して私のために判断を下し、私を

導き、迫害者の誹詐を容易に知りぬいて、遂に私を在りのまゝに見んことを期待した。私が對話録を書いて、之を後世に傳へやうと、幾百千の愚な行を試みたのは此の希望のためだ。この希望は例令遠ざけられても、當代に尙ほ正しき心の人を求めた時と同様に私の精神を激動した。私は徒らにさまざま及ばないことを願ふたので、今日の人々から玩弄物にされたのだ。私は對話録のなかに、この期待の原因を説いた。私は自分を欺いた。私は死ぬ前に、充分の靜平と、少しも煩はされない休息との時間を發見すべきことを幸にも可なり早く思い付いた。この時間は私の書き出す時代に初まつたので、もう中斷しないであらうと信ずる。

私を厭ふた團體のうちに、斷えず現はれる嚮導者に導かれ

て、再び公衆に交はらうと考へたのが例令他の時代に於てすら甚だしい誤謬であつたと、新しく思ひ返して悟つたのは間もないことである。個々の人々は死んでも、寄り集つた團體の人々は死なない。以前と同じ感情は永く引き續いて、丁度悪魔のやうな、亡びない激しい彼等の惱みは常に同じに働いてゐる。私の凡ての個々の敵は死ぬことがあつても、醫師や辯士などは尙ほ生きてゐるであらう。私の迫害者をこの二つの團體に限るとしても、生きてゐる此の身をこのままに置かないから彼等は私の死後も、亦悪口を云はずにはゐまい。私はこのことを確かめなければならぬ。恐らくいつかは、私の實際辱めた醫師は自ら鎮まるであらうが、しかし私の敬愛し、信任して一度も辱めたことのない辯士、即ち僧侶は永く

慰撫することが出来ぬであらう。私が罪を作つたのは、彼等自身の不正のためだから、その自負心のために決して私を許さないであらうし、亦彼等が斷えず怨を懐かせた公衆も又自ら鎮まるのが困難であらう。

世の中の凡てのことが私に終りを告げた。人々はもう此の世に於て私に利益を與へることも害を加へることも出来ない。この世界にはもう私の望むものも、恐れるものもない。私は深淵のどん底で安心を得た憐むべき不幸の人間に過ぎないが、しかし神のやうに泰然自若として、些も毀譽貶褒に動かされないのだ。

爾來外部の凡ての事物は、私に無關係である。私はもうこの世の中に、隣人ももたなければ、同胞ももたないし、また

兄弟ももたない。私のこの世にゐるのは、恰も住みなれた惑星から見知らぬ惑星のなかに落ちたやうなものだ。若し私の周囲に何物かがあつても、たゞ私の心を憂ひ悲しませる物に過ぎない。私に觸れるものや、私を取圍むものを見ると、いづれも私を憤らせる蔑むべきものか、又は私を悲ませる憂ふべきもののみである。然らばこのやうに悲い、無益な、苦痛多い凡ての事物から私の心を遠ざけやう。私はたゞ慰藉や、希望や、平和をのみ見出すのだから、今後は、私自身のことばかりを、考へなければならぬ。私がこの境地にゐて、嘗て懺悔録と名付けた、眞面目な著作の續きに、再び着手するのである。私は晩年を自分自身の研究と考察とに献げる。他を計算することを止めて、豫め自分を計算して置かなければならぬ。

らない。私は全く私の心と語り合ふ歡樂に生きやう。心ばかりは何人も私から取り除くことが出来ない。私が自分の内部の状態を省みて、若し之に勝ぐれた秩序を與へ、その欠點を矯めることが出来ても、私の瞑想は全く無益ではなからう。そして假令私は此の世に於て何物をも利することがなくとも、決して自分の晩年を失ふことはあるまい。私は毎日の逍遙の餘暇に、屢々面白い考が續々と浮ぶが、遺憾なことは、此等の考は記憶から消えてしまふ。私はこれからの出来事を、一々書き留めて置くことにしやう。それを讀む毎に、私は快樂を覺えるであらうと思ふ。私は鍛えられた自分の心が得た價値を思ふて、不幸や迫害者や恥辱を忘れるであらう。

この記録は、私の瞑想を書いた、日誌に外ならない。考に耽ける世捨人は、必ず多く自分のことを思ふものであるから、私にも自分に關する多くの問題がある筈である。就中逍遙の際に、頭に浮ぶさまゝ異なる觀念を、私は皆一様にそれ／＼書き留めるつもりである。私は自分の考を、ありのままに書くのだが、動もすれば、前日の觀念と翌日の觀念との間には、僅かの連絡よりないかも知れない。しかし私の感情と思考とによつて、新に私の性質や氣分を知ることが出来るであらう。これ等の感情と思考とは、現在の異つた地位に於て、私が精神の日々の糧を造つたのだ。故にこの記録は、懺悔録の附録とも看做すことが出来るが、しかし私はその表題を付けないし、その表題に該當するとは思はない。私の心

は艱難に鍛へられて、自ら清淨になつた。そして注意して測つてみても、誹謗すべき僅かの傾向しか辛うじて見出されない。地上の凡ての愛情が、根こぎにされてしまつたから、この上どうして懺悔することが出来るやうぞ。私はもう自分を責むることも、褒むることも出来ない。私はこれから後、人々のなかには價值のないものである。無益なものである。もう世間の人々と實際の關係、眞實の交際といふものをもたない。善をなしても惡に變り、他人や自分に害を加へずには行動することが出来ないから、黙つて何も爲すにゐるのが、私の唯一の義務となつた。そして私はその義務を、はたさなければならぬ。しかし私は、このやうに身体を動かさずにも、心は尙ほ働いて、感情や思考を導き、その内部の精神

生活は、現世に於ける地上の凡ての利害が消滅したので、却つて増加したやうに見える。私の肉体は、もう私にとりては一種の障害物で、以前から出来るだけ之を脱離して拘泥しない。

このやうな不思議な境遇は、慥に吟味をして書き留めて置く価値がある。この吟味に私の閑散な晩年を献げる。これをうまく成就するには順序と方法とが必要だが、私はこの勞作に適しないし、又私の精神の變化と、その變化の連続とを計算する自分の目的から遠ざかることになる。

私は物理學者が、毎日變化する氣象を知るために、空氣を計ると同様に或る見地から自分に作用を施すのだ。私は自分の精神に晴雨計を適用する。そしてこの能く指揮されて永

い間繰返された作用は、氣象と同じやうに確實な結果を齎すであらうと思ふ。しかし私は、この企をこゝまでは擴げない。これについて系統を得ずとも、この作用の規則を保てばそれで満足する。私はモンテエヌと同じ企を爲したが、その目的は全く反對である。彼は他人のために其論文を書いたが、私は自分のために此の瞑想を書くのに外ならない。私は今よりも齡がふけて、死に近づいた時、若し自分の願の如く、今と同じ地位に留つてゐても、この記録は、自分がそれを書いて味つた甘味を、自分に思ひ起させるであらう。そして再び過去を復活させて、所謂私の生存を二重にするであらう。世人は何と云つても、尙ほ交際の喜びを味ひ、そして丁度自分より若い友と共に生活するやうに、他の時代に老い衰へて

生活するであらう。私は迫害者の貪婪な手から免れて、出来るなら他の時代の人々に傳へやうと、断えず心配しながら曩の懺悔録と對話録とを書いたのだ。この記録を書くためには、もうそんな不安が私を苦めない。そんな不安を懐く必要はないのだ。そして一層人に知られたいと思ふ望みは、私の心から消えてしまつて、運命や、眞實の記録や、私の無事を證する作物に關しては、全く無頓着になつた。これ等は恐らく既に、永久に消滅したのだ。今後人が私の爲したことを偵察しやうが、この記録を懸念しやうが、奪ひ取らうが、禁止しやうが、偽造しやうが、一向差支がない。私はこの記録を隠しもしなければ、示しもしない。人が若し私の生活から、これを奪つても、これを書いた愉快も、その内容の記憶も。

又は静かな瞑想をも奪ふことが出来まい。この記録は瞑想の産物で、その瞑想の泉源はただ私の精神と共に盡きるのである。私は最初から自分の運命に反抗しないで、今日のやうな處置を取つたならば、人々の凡ての努力や、その凡ての驚くべき手段は、更に効がなかつたのだ。そして彼等の凡ての陰謀も、私の安静を妨ぐる事が出来ず、今後如何なる事件によつても、私の安心を煩はす事が出来なかつたであらう。彼等は随意に私を辱めて喜んで、私に何の罪もないと思ふ喜悅と、平和に生き長らへることを妨げることが出来ないのだ。

二

想像力の衰弱——銷魂の歡喜——メニル ●モンタンの逍遙——植
物採集——意外の災難——蘇生の感覺——妻の驚愕——悲しい憶
測——某夫人の來訪——謝絶の書翰——逝去の噂——原稿の豫約
出版——解脱の泉源

それで私は人一人居らぬ、實に奇体な地位に於ける自分の心の平素の状態を、書きつけて置かうと企てたが、これを實行する最も容易い確かな方法は、自分の孤獨な逍遙と瞑想と

を、在りのままに、忠實に記録することだと悟つた。頭が少しの拘束をも受けないで全く自由なときには、何の苦もなく無雜作にさまざまの觀念が浮んで來る。この孤獨と瞑想との時間は長くはないが、誘惑もなく障害もなく、全く自己に立歸つた時で、赤裸々に自分を表現する時である。

私は幾程もなく、この計畫を實行するには、餘りに後くれ過ぎたと思つた。私の想像は以前より衰へ、もう昔のやうにその感じた事物を靜思する活氣がなくなつた。私は以前ほど瞑想の樂に酔はなくなり、その後の瞑想には、創造よりも追懐が多くなつた。なまぬるい倦怠が、私の凡ての能力を痺らかし、生活の力は段々弱り、私の心はその崩れた外被から、辛うじて躍進するに過ぎない。自分にその資格があると思つ

て、勝ぐれた地位を望むの念もなく、私は唯だ過去の追憶にのみ生きてゐる。それで私が老衰する前に、自分自身を靜に考へるためには、少なくともこの世に凡ての望みを失ひ、この地上に心の糧を得ることが出来ないうで、徐々にその固有の食物を取り、自分のうちにその糧を求めらうになつた、數年前に遡らなければならぬ。

この方法を見出したのは、餘りに遅かつたが、間もなくそれは、私に凡てのものを償ふに足るだけ豊かになつた。自分に歸る習慣がついてから、私は殆んど遂に不幸の感念や、記憶を失つてしまつた。この切實な經驗によつて、私は眞の幸福の源は自分のうちにあることや、それから幸福を望むものを實際不幸ならしめるのは人の仕業ではない、と言ふことや

を悟つた。私は四五年以來、この瞑想のうちに、愛らしく優しき心の人々を見出す、内部の悅樂を斷えず味はつた。獨り逍遙しながら、時として味ふこの消魂の歡喜を得るに至つたのは、實に迫害者のお蔭だ。彼等がゐなかつたならば、私は決して自分自身のもつてゐる、この寶を知ることを見出すことも出来なかつたであらう。富裕な境遇にゐて、何うして忠實な記録が出来やうぞ。楽しい瞑想を思ひ出ださうとして、之を詳しく説く代りに、再び瞑想に落ち込んでしまつた。かうなるのは既往を回想するからである。そして人が實際感ずることが無くなれば、程なくそれを知ることが無くなるものである。

私は懺悔録の續篇を書かうとして逍遙するのだが、此の逍

遙の折に、能くこのことを感じた。そして私はこの逍遙の折に、意外の出来事に遇つて、自分の思想の糸を断たれ、暫く他の方面を考へることになつた。

千七百七十六年十月廿四日の木曜日に、私は晝飯の後、廣街を過ぎてジエマン・ヴェル街に行き、それからメニル・モンタンの丘陵に登つた。そして其處から小徑を歩いて、葡萄畑や牧場を横ぎつて、シャロンヌに行つた。笑つてゐるやうなシャロンヌの風景は、この二つの村落の界をなしてゐる。次に私は他の道を過ぎ、同じ牧場を通つて、元との處に歸らうと迂回した。いつも景色がよいので、私はそれにひかされて、面白いと思つて其處を徘徊してゐた。そして緑草の上に時として植物を選定するために留まつてゐた。私は巴里の近傍に

は滅多にないが、この附近には澤山ある植物を發見した。その一つは菊科屬のピクリス・ヒエラキオイデスで、他は繖形科のピウブレリウム・フアルカチウムである。こんな發見をなしたので、嬉しまぎれに長い時間を費した。そして尙ほ一層珍らしい植物を見出した。それは文明國には特に稀な植物で、即ちケラスチウム・アクアチキウムである。私はこの日災難に遭つたのだが、それでも自分の携へていつた書籍のうち之を挿し入れてあつた。そして乾燥した植物の標本の内に加へて置いた。

私は尙ほ花の咲いた、他の多くの植物を仔細に考究した。これ等の植物の形や數は、既によく知つてゐたが、それでも樂みであつた。それから私はこんなこま／＼しい觀察をやめ

て、それと同じ心地よい、寧ろ一層痛切な感想に耽けらうとした。葡萄の收穫が終つてから數日を経てゐたし、都市の散策者は既に歸つて了つた。農夫などは又冬の勞作が初まるまで田畑から去つた。平野は尙ほ綠色を呈してほほゑんでゐたが、木の葉は稍落ち散つて物さびしく、到る處に寂寥の面影と冬の近づいたことを示してゐた。その光景には、私の年齢や運命によく似た、一種の楽しく悲しい感銘が交じつてゐた。私は自分に或る無辜な、不遇な、即ち尙ほ活き／＼した感情に充ちた心や、尙ほ若干の花に飾られた精神の衰凋を見た。この精神は既に悲哀のために萎れ、倦怠のために枯らされてゐた。私は獨り棄てられて、初めて凍る氷の寒さの來たのを覺えた。私の涸れ盡した想像は、自分の心に應じて形

作つた静寂を亂すことが出来なかつた。私は嘆息しながら云つた。私はこの世で何事を爲したか、私は生きるために行動した、そして生きずに死ぬのだ。これは少なくとも私の過失ではなかつた。人々は私に迫害を加へて善き作物を作らせなかつたので、私は之を造物者に献ぐることが出来ないからせめて誘惑された善き意志や清き感情や、人々の輕侮に堪へた忍耐の貢物を持參する。私は反省して自ら感動した。私は少年時代からの自分の心の行動、則ち壯年時代や人々の社會から引離された後の、永い退隱生活の際に於ける心の行動を、再び考へてみた。自分の心の凡ての感情や、盲目だがしかし優しい愛着の念や、數年以來懐いてゐた悲みの少ない慰めの觀念の上に、私は満足して立歸つて來た。私は嘗て之を棄て

たときと同じ楽しい心持で、書き出すために、充分これ等のことを思ひ出さうとしたこの日の午後は、こんな静かな瞑想到に耽けりながら過ぎた。そして自分はいたく満足して、其日の日課を爲し續けてゐた。ところが私は瞑想に捉はれてゐたので、此時次に話すやうな意外の出来事に遭つた。

私は六時ごろ、ガラン・ジャルデニエに相對したメニル・モンタンの坂にゐた。この時私の前を歩いてゐた人々が、突然急に道を避けたが、その際大きな獵犬が突進して來た。その犬は母衣馬車の前を脚を上げて進んで來たのだが、私に氣付いたとき其道を戻ること、迂回する時間もなかつたのだ。私が地上に投げ倒されないやうにする唯一の方法は高飛びするより外にないと思つた。かうすれば私が飛び上つて空中にゐ

る間に、犬が丁度自分の下を通ることが出来るからであつた。この思ひ付きは電光より早かつたが、之を考へる間も行ふ間もなく、忽ち災難に遭つてしまつた。われに戻る瞬間までは、打撃も感じないし墜落も感じないし、また何ものをも感じなかつた。

私の意識を回復したのは深夜であつた。私は三四人の若い人々の腕に抱へられてゐた。此等の人々は私を見出したことを語つた。その犬はその躍進を留めることが出来ないで、私の兩脚の上に突進した。そしてその體軀とその速力とで私に衝突して、私を眞逆さまに押し倒した。即ちその大きな臍が、私の身体の重みを支へて、甚だしく凸凹ある舗石の上に打ち倒したのだ。私は坂から落ちたと同様に、脚よりも頭を下に

して、激しく落ちたのだ。犬が附属してゐた母衣馬車は、直ぐその後に来た。そして若し馭者が、その瞬間に馬を留めなかつたならば、私は馬車に引かれたに相違ない。

これだけのことは、私がわれに返つた時、なほ私を支へてゐた人々の物語によつて知つたのである。この瞬間に於ける私の状態を兎に角こゝに述べることにする。

夜は更けた。天には若干の星があつて、少し青かつた。この最初の感覺は、鳥渡の間心地よかつた。私は猶ほそれより外に解らなかつた。私はこの瞬間に生き返つたのだ。そして私の深い生存に、自分の見出した凡ての事物を詰め込んだやうに見えた。その瞬間には私は全く何物をも記憶しなかつた。自分といふものに付いて、些も明晰な觀念をもたなかつたから、

自分が蘇生した事については、尙ほさら思はなかつた。自分は誰で何處にゐるかをも知らなかつた。不幸も、恐怖も、不安も感じなかつた。小河の流れるのを見るやうに、自分の血液の流れるのを見た。且つこの血液は何うしても自分のものだと考へられなかつた。私は自分の身体のうち、一種の楽しい静けさのあることを感じた。私はこの楽しい静けさを思ひ出す毎に、如何なる勝ぐれた快樂も之に比較するに足らないことを知つた。

私は住所を問はれたが、それに答へることが出来なかつた。私は何處に自分がゐてあつたかを問ふと、その人々はオオト・ボルヌだと云つた。これがモン・アトラアス(非常に高い山の義)と云つたやうであつた。引續いて私は自分の居る國や、市や

區を問はれた。しかし尙ほ私は之を認める程意識が明瞭でなかつた。自分の住所や、姓名を思ひ出すためには、其處から廣街までの凡ての距離を要した。私の知らぬ某氏は親切にも暫らく私の側にゐてくれたが、その住所の遠方なことを知つて、タンブルから馬車に乗つて、自分の家に歸つたらよからうと忠告した。私は大分血を吐いたが、何の悲哀も憂苦をも覺えないで至極輕捷に歩いた。しかし私は寒さに慄えたので、砕けた齒が甚だ氣持悪く轢り鳴つた。何の苦もなく歩いたので、タンブルに着いた時、馬車の内に寒がつてゐるよりは、寧ろ徒歩でかうしてあるいたほうがよいと思つた。私は全然健康なときと同じやうに、無雜作に自分の道を辿つて、混雜や馬車を避けながら、タンブルからブラトリエル街まで、

半里ばかり歩いた。私はその街に着いて門を開いた。そして暗がりのうちに階段を昇つて何の故障もなく、遂に自分の家に入つた。私はその時ですら、尙ほ自分の家をよく解らなかつた。

妻は私を見て驚いて叫んだが、私はこの叫びによつて、自分の思つたよりも負傷の大きいことを悟つた。私は尙ほ自分の損傷を知らずに、その夜を過ごした。翌日になつてから、初めて自分の損傷を感じましたし知りもした。内の方は上唇から鼻まで裂け、外の方は皮膚に保護されてゐたが全く離すことが出来なかつた。四本の齒は上脛に喰ひ入つて、顔の凡ての部分は傷ついて、いたく脹れあがつてゐた。右の拇指は押し潰されて擴がり、左の拇指は甚だしく傷つき、左の腕も

壓潰され左の膝は強い打傷のために少なからず脹れあがつて全く折り曲げることが出来なかつた。しかしこんな災難に遭ひながら、何の重傷も負はないし、一本の歯をすら失はなかつたのは、實に不幸中の幸であつた。

これが私の災難を在りのままに書いた記事である。數日以内に、この記事は似ても似付かぬほど變へられて巴里に擴まつた。私は以前からこの誇張された記事について説明すべき筈であつた。しかしそれには多くの奇体な事情が附加され、多くの曖昧な説話や、緘黙が伴つてゐた。人々はこの事について、可笑しいほど謹慎な態度で私に話した。これ等のことは皆不思議でならないので、私は氣掛りになつた。私は常に暗昧を憎んでゐた。暗昧は自然に私を恐怖させるからだ。多年

の間、私を取圍んだ暗昧のために少なからず私は脅かされた。この時代の多くの奇体なことのうち、私は此處に唯だ一つだけ述べることにする。この一つによつて他を推定するに充分である。

私と少しも関係のない某氏は、私の災難を知るため、その書記を遣はして、切に私に手傳ひたいと申込んで來た。それはその場合私を慰めるに、さほどの効果がないやうであつた。その書記は極めて親切であつて、若しお氣に入らないなら、直ぐそのことを某氏に書いてやつて下さいと云つた。この並ならぬ親切と、それに伴ふ信任とから察して、私は何かそれに秘密があると悟つた。その秘密を搜ぐつてみたけれど、知ることが出来なかつた。私を恐怖させるには、そんなに多く

手数がかからない。災難に遭つて熱が出て、頭が昂奮してゐる場合だから、尙ほさらのことだ。私はああか、かうかと不安な悲しい數限りない憶測に耽つた。そしてこれは、冷淡で何事にも興味をもたないためではなく、寧ろ熱に冒されて夢中になつたためだ、と周囲の人々に曲解された。

私の心の静平が全く破れたのは、もう一つの出来事のためだ。某夫人は數年前から私をもとめてゐた。何のためか、私には解らなかつた。過分なつまらぬ贈物をしたり、屢々訪ねて來たりした。それには理由もなく、樂みもないのに、こんなことをするのだから、何か秘密の目的があるに相違ないと思つたが、私には、あからさまに何もいはなかつた。彼女は自作の或る小説のことを話した。その小説を女皇に献納しや

うと望んでゐた。私は閨秀作家について思つてゐたことを彼女に話した。彼女はこの企によつて自分の運命を回復したいと云つた。この目的を達するに、彼女は保護が必要なのだ。私はそれについて何とも答へなかつた。その後彼女は女皇に近づくことが出来ないから、その小説を出版することに決したと云つた。彼女のもとも、従ひもしない忠告を與へる場合ではなかつた。彼女は嘗てその原稿を私に見せると云つたが私はことさら見たくはなかつたので、彼女もそれを見せなかつた。

私の怪我也癒えてきた或る天氣の好い日、私はこの本の全く印刷されて、製本されたものを贈られた。その序文を見ると、ひどく私を賞讃して、忌々しくも仰山に誇張して書き立

ててゐたので、私は不快でならなかつた。こんな野鄙な諂諛は、決して恩恵とは云へないのだ。私の心はこの時更に惑はなかつた。

數日後、某夫人は、その娘とともに私を訪ねて來た。彼女はそれに添へた一の書附のために、その本が非常の評判となつたと告げた。私はその小説を急いで讀んだので、その書附のことには殆んど氣が付かなかつた。私は夫人の歸つた後再び其の小説を讀んだ。私はその本の傾向を吟味して、彼女が度々の訪問や阿諛や、その序文の讚辭の動機を發見した。これ等のことは、其の書附を私が書いたのだと、世間に思はせるため、従つてその小説を出版した事情から著者の招く非難を、私に負はせるために外ならないのだと私は思つた。

私は其の本の評判や、其本が興へる感銘を破る方法を知らなかつた。私の取るべき手段は、その夫人や娘の無益な虚飾的な來訪を斷はるより外なかつた。それで私は次のやうな書をその夫人に贈つた。

「予は如何なる著作家の來訪をもお斷り可仕候。予は御身の好意を感謝すると共に、併せて今後御來訪の榮を賜はらざらんことを希上候」

彼女は形式的に鄭重な返書を送つたが、それはこんな場合に送るやうな普通な手紙であつた。私は無作法にも、その過敏な心に短劍を向けたのだ。そして其の手紙の調子から察して私に對して活き活きした誠の感情をもつてゐたので、彼女はひどく悲しますには、この絶交を耐へ忍ぶことが出來まい

と思つた。このやうに凡ての事物について、公明正大にすることは、この世に於ては恐るべき罪惡のやうに看做されてゐる。それで當代の人々の目には、自分が彼等のやうに偽つたり欺いたりしない時は、奸曲にも邪惡にも見えたであらう。

私は既に幾度も外出した。そして何回となくチユイユイを散歩した。その時驚いたことには、其處に尙ほ自分の知らぬ或る他の耳新しい自分に關する話のあるのを知つた。私は災難に遭つて死亡したとの噂の擴まつてゐたことを知つた。

この噂は極めて急にひろまつたばかりでなく、私がそれを知つてから十五日以上も、私が慥に死んだと、宮廷の人々の口に上ぼつたほど、長く消えずにゐた。このことを聞いたアヅイニヨンのクウリエは、この耳よりの好報を人々に知らせて、

この場合私の死後に加へやうとする凌辱と輕侮とを豫め祭文に作つたのである。

この話は尙ほ一層奇体な或る事情を伴なつて來た。私は偶然に之を知つたので精しいことを知ることが出来なかつた。

それはこの時人々は、私の家にある原稿を印刷するために、豫約出版の加入者を募集したことだ。それから偽りの草稿を集めて私の死後、直ちに之を私の書いたものだとするために大急ぎでその用意をしたとのことを悟つた。何となれば彼等が實際に見出した草稿を、悉く忠實に印刷したと思ふのは、良心ある人の考へ及ばぬほど愚昧なことで、これは私が十五年間の經驗から充分に保證するところだ。

これ等の思付きは、頻りに前と同様に驚く可き思付きを起

させて、私の衰へた想像を再び脅かした。そして彼等が間斷なく私の周圍に強ゆるこれ等の陰鬱な愚昧は、自然とそれから起る凡ての恐怖を喚び返した。私はこれ等のことをいろいろに註釋したり、彼等の自分に與へた、説明し難い秘密を悟らうと努めたりして、疲れきつてしまつた。こんな多くの謎のやうなことから考へてみて、私は自分の以前の決論を悉く肯定しなければならなかつた。即ち私の肉体の命數や、名聞の命數は、現代の凡ての人々から一樣に定められたので、自分がどんなに努力しても之を免れることが出来ないと悟らなければならなかつた。それを除くことに趣味をもつてゐる人が現代に於て之を認容しなければ、自分では到底それを他の時代に傳へることが不可能であるからである。

しかし私は此度非常に深入りした。こんなに多くの意外の事情が寄り集り、最も慘酷な敵が、所謂偶然に誇張されて増加し、政府を支配する人々や、輿論を指導する人々や、地位ある人々や、信用ある人々が、潜に或る怨を私に懷くものの中から選まれ、悉く合同して陰謀を企てた。こんなに凡てのものが一致するのは、餘りに異常であつて、單に偶然な出来事とは看做すことが出来ない。この仲間入りをすることを斥けた唯だ一人の人も、それに反對した唯だ一つの出来事も、それを妨げた不意の唯だ一つの事情も、之を挫くに充分であつた。しかし凡ての意志や、宿命や、機運や、凡ての成り行きは、これ等の人々の事業を鞏固にした。この驚くべく悲しむべき一致はよしや勝つてゐないにしても十分に成就するこ

とを私は信じた。私は過去や現在に於ける特殊な幾多の観察によつて、今後自分を、人間の理性をもつた不可解な天の秘密の一つであると看做すことが出来るとの意見を懐いた。これは自分が是迄で、人々の邪悪に基づく果實だと思つてゐたそのものである。

この考は私を脅かしたり、悲しませたりしないで、私を慰めて心を静かにし、天運に安んずるやうにした。私は聖オオガスチンのやうな譯にはゆかない。彼は神意なれば地獄の苦を受けても自ら慰めることが出来たのだ。私の天命に安んずる心は、それより劣つた解脱の泉から流れて来るのであるが、實際それに劣らぬ程純潔な、そして喜ばしいことには私の尊敬する完全な實在の最も貴ぶべき泉から流れて来るのである。

神は公平である。彼は私の耐へ忍ぶことを欲する。そして私の邪念のない、無辜なことを知つてゐる。私の安心の動機はこれである。私の感情と理性とは、この安心が決し、自分を欺かぬであらうといふてゐる。故に人々や運命の爲すままに任せやう。不平を云はずに耐へ忍ぶことに慣れやう。蓋し一切の事物は、終にその秩序を回復するものであるから、早晩私の順番も来るだらうと思ふ。

三

老の研究——幼年時代の回顧——青年時代の希望——虚飾物の
排斥——心身の改革——哲學者との争論——困惑の迷宮——確乎
不拔な主義——迫害者の道徳——晩年の事業

「予は断えず學びて老いゆく」ソロンはその老年時代に、屢々この詩を繰り返した。私も老年にこのやうに云ひたいと思ふ。しかしこれは、二十五年以來の経験によつて得た、一種の甚だ悲しい智識である。無智もまた棄てべきものではない。

艱難は疑もなく、一つの偉大な教師であるが、その授業料は高い。それでそれから得た利益は、その拂つた授業料ほどの價のないことは屢々ある。加之その遅々たる授業が利益を得る前に、之を適宜に役に立てることが出来ない。

青年は智識を學ぶべき時代で、老年は智識を用ゆべき時代である。私は経験が断えず人を教へるものだ、といふこと認める。しかし経験は自分の前にある時間、即ち將來をのみ益するのだ。死の迫つた時は、如何にして生くべきかを學ぶべき時ではない。

噫、私の運命や、他人の感情について、悲しくたどくしい経験によつて得た智見が、自分に如何なる利益を與へたか。私は人々に陥れられた不幸を一層よく感じたいばかりに、彼

等を一層よく知らうとしたのだ。この智識は彼等の凡ての陥穽をあばいて、それを避けさせなかつた。多くの陰謀に圍まれた私が、以前よりも疑念が少なくならずに、多年の間喧しい友の餌食や玩弄物と成るやうな弱い穩やかな此の信念を、何うしても常に保つことが出来なかつた。私は實際彼等に欺かれてその犠牲と成つてゐた。しかし私は彼等から愛されてゐた。私の心はその友誼を楽しんだ。その友誼は彼等が常に誘ひ起させたので、自分同様に彼等を親愛してゐた。これ等の楽しい幻影は破れてしまつた。時日と理性とは、この悲しむべき事實を暴露して、私の不幸を知らせた。そしてその不幸は、愈やし難いといふことを悟らせ、最早天命に安んずる外、他に方法のないことを知らせた。そこで既往に於ける凡ての

經驗は、私にとつて、現在にも又將來にも、何の利益のないものである。

人は生れて此の人生の競争場裡に入り、死ねば其處を出るのだ。人はその生涯の終に達すれば、以前よりもよくその身を導くことを學んでも、もう何の甲斐がない。寧ろ何うして人生を去るべきかを思ふべきである。老人の研究すべきことは、例令尙ほ爲すべき事が残つてゐるにせよ。専ら死ぬべきことである。然るに當代に於ては、儘に此の研究は充分爲されてゐない。この事をば措いて顧みずに、他のことのみを考へてゐる。老人は皆兒童よりも一層生に執着する。そして青年よりは、一層不遇でこの世を去る。これ彼等が、この世に爲した凡ての骨折りが、終に無駄になつてしまふと思ふから

である。彼等がこの世を去る時は、彼等の注意せる凡てのこ
とや、財産や、勤勉から得た凡ての果實を棄てる。死ぬとき
持つて行くことの出来るものを生きてゐる間に得やうと考へ
ないのだ。

私はこのことに付いて、云ふべき場合に悉く云つた。私は
自分の反省から、もつと利益を得ることが出来なかつたにせ
よ、適當の時に反省してよく之れを消化した。私は幼年時代
から人生の渦中に投せられたので、自分はこの世に生きるた
めに造られたのでないことと、逆も自分の望む地位に達する
ことが出来ないことを、經驗に依つて早くから知つたのだ。
それで私は見出すことの出来ない幸福を、人中に求めないの
で、私の燃えるやうな想像は既に生の空間より以上に飛んで

丁度見知らぬ土地に於けるやうに、自分の定め得る一種の靜
平な心理状態を得て、自ら辛うじて安んずることが出来た。

この感念は、幼年時代の教育に養はれ、生涯の間、長々し
いらくの不幸や、不遇に力づけられ、何時でも未だ嘗て
ないほど強い興味と注意を以て、自分の性質や運命を知ら
うと努めしめた。私は自分よりもつと巧に哲理を述べた多く
の人々を見た。しかし彼等の哲學は謂はゞ彼等と無關係であ
つて、恰も單に好奇心に驅られて始めた、或る機械の研究の
やうなものである。彼等は學者ぶつてものを云ふために、人
性を研究したので、自らを知らうとするためではない。他を
教へるために勉強するので、自ら内奥を知らうとするため
はない。彼等の多くは、唯だわけもなく頼まれさへすれば本

を作らうとしてゐる。本が出来て出版になつても、それが他の本よりも評判がよくないし、又非難された際にうまく辯護が出来ない時は、その本の内容に全く興味をもたなくなる。そればかりでなく、その本の評判がよくさへあれば、その内容の眞偽などは毫も問ふところではない。しかし私は彼等とは別で、自分が學びたいと思つたのは、自分自身を知るため、他を教へるためではなかつた。私は常に他を教へやうとすれば、先づ最初に充分自分を知らなければならぬと信じた。人々の間に立交じつて、是れまで爲した凡ての研究は、私の晩年を送らうとした寂しい一孤島で學んだことと殆んど大差がないのだ。人の爲すべきことは、多く人の信すべきことによつて定まる。人の意見はその行爲の規矩である。これ

は常に私の主義とするところで、この主義によつて私は自分の生を導くために、長い間、屢々生の眞目的を知らうと努めた。しかし私はこの目的を搜ぐる必要がないと思つたので、程なくこの世の中で巧に自分を導く才能の不足なのを氣にかけぬやうになつた。

風儀や敬虔の念に富んだ家庭に生れ、智慧と信仰とに満ちた牧師の家で温和に育てられた私は、極く幼い時から、さまざまな主義や格言を受け入れたのだ。これ等の主義や格言を世人は偏見だといふかも知れないが、全く私の頭から取り棄てることは出来なかつた。私は幼年から棄てられて、撫愛に誘はれ、虚榮に惑はされ、希望に誤られ、必要に強いられて加特力教徒となつたがしかし私は常に基督教徒であつた。そ

して程なく習慣に捉はれて、私は真面目に新しい宗教に歸依した。ウアラン夫人の教訓と實例とは、益々この歸依を固くした。花やかな青年時代を過ごした寂しい田舎と、善良な書籍の耽讀とは、私の天賦の氣質を驅つて親愛な感情を生ませ、そして殆んど私をヘチロンのやうな篤信家となした。隠所に於ける瞑想や、自然の研究や、宇宙の默想は、世を逐れた私を断えず造物者のはうに躍進させ、そして楽しい不安を懷きながら、眼に見える凡てのものの目的と、心に感ずる凡てのものの原因とを搜らせた。運命のためにこの世の激流の中に棄てられたとき、私は暫し自分の心を慰めるより他に手段がなかつた。自分が楽しみに過ごした暇を悔む念は到る處に胸をそつて、私を無頓着となし、眼に映する凡ての事物を厭は

せ、幸運や名譽に導くものすら悉く嫌はせた。安からぬ望を懷いて心平らならず、願ふことも得ることも以前より一層少なくなつた。私は幸福の微かな光のうちに、自分のもとめ得る一切のものを得ても、自分がわけもわからずに徒らに得やうとした此の幸福を見出すことが出来ぬであらうと思つた。このやうに凡てのものは、私が不幸に會はない先きに、此の世から私の愛情を離すやうに導いた。私は心に毫も悪い傾向を懷かなかつたが、いろく、な多くの悪い習慣に導かれ、時には理性に基づく主義方針をもたなかつたが、亦わけもななく義務を喜こんだりして生活しながら貧困と富裕との間、聰明と迷誤との間を漂ひながら四十の歳に達した。

私は青年時代から、この四十の歳を以て、立身に要する努

力の期限と定め、自分の凡ての企をこの時まで爲し遂げやうと思つたのだ。私はこの歳以來、自分の得た地位にゐて、もう其處を去らうとせず、また將來のことを思はず、何事も企てないで、殘年を送らうと固く決心したのであつた。その時機は來たので、私は無雜作にこの企を實行した。例令その時私は、もつと確實な位置を得たいと望んでもよいやうな運命をもつてゐたが、私は嘗に些の遺憾もなくその望を棄てたばかりでなく、實際喜こんでその望を棄てた。私はこれ等一切の誘惑や、無益な希望より遠ざかつて、全く何事にも執着せず、心の休息を得やうとした。この無關心、即ち解脱を得やうとする念は、常に最も力強い私の趣味であつたと共に最も確實な私の嗜好であつた。私はこの世とこの世の華美を

棄てた。私は凡ての裝飾物を斥けた。刀劍も、懷中時計も、白きズボンも、鍍金も、頭巾も斥けた。全く質素な鬘や、羅紗の可なり大きな上衣をも斥けた。尙ほその上、棄てたこれ等のものに價値を與へる貪慾や渴望の念を、私の心から取り除いた。私は毫も自分に適しなかつた地位を棄てた。そして音譜を謄寫することを職業とした。この職業は常に私の頗る好むところであつた。

私はたゞ外部を改めるばかりで満足しなかつた。この外部の改革は疑もなく私の心意に、もつと苦しい、もつと必要な改革を迫まつた。私は二度とそれを爲ないと決心しながら、自分の内部を厳しく吟味して、爾後の生活のために之を整へた。私は熱心にこの企を實行したのだ。

自分に行はれた大きな革命や、自分の眼前に現はれた他の無形の世界や、自分がその犠牲となることを尙ほ豫想しないが、不條理であると氣付いた世人の道ならぬ判断や、自分が僅にたづさわつた文學の虚榮よりも他の利益を望む慾念や、自分の華やかな前半生を過ぎた路よりも、もつと確りした路を今後通らうとする願望やは、多年の間自分が必要だと思つてゐた此の大きな檢閲、即ち心の内の吟味を餘儀なくしたのだ。それで私はこの企を實行した。そしてこの企を完全に實行するため、自分に屬してゐた何物をも忽せにしなかつた。私がこの世を全く棄てたのは、實にこの時からである。この静かな場所を望む強い念慮は、この時以來、もう私を去らなかつた。私の企てた事業は、絶対にこの世から退隱しなけ

れば實行することが出来なかつた。社交の混雜に妨げられない、長い間の平和な瞑想が必要であつた。そこで私は、一時従來と異なる生活を營まなければならなかつた。則ちその生活とは、その後強制されるか、又は鳥渡の間かでなければ、妨げられることのない、思ひのままな精神生活であつた。そしてそれから私を迫害した人々が、私の生活を私獨りに限つて、私を不幸にするためにこの世から引き離したのだが、よく考へて見れば、彼等は却つて私の幸福のために私自ら盡したよりも、もつと多く盡したのであつた。

私は比較的熱心に企てたこの事業に身を専らにし、且つその事の重大なことや、自分の慾望やに意を注いだ。私はその時、殆んど古代の哲學者に似たところのない、當今の哲學者

と共に生活した。彼等は私の疑惑を解き、私の無定見を除かないで、却つて私の重要視した凡ての眞實を動搖させた。彼等は熱烈な無神論者ですばらしい獨斷説を唱へてゐたのだから、人が自分と異なつた學説を主張すると憤らすにはゐなかつた。私は屢々彼等と議論したが、その論據は充分薄弱で、寧ろ憎惡の念からそれを辯護した。そしてその學説を維持するには、才智が足らなかつた。しかし私は決して彼等の冗漫な學説を受け入れはしなかつた。こんなに自説を固持する、厄介な堪へ難い人々に反抗したので、私は一層彼等から怨を受けざるやうになつた。

彼等は私を説きふせることが出来なかつたがそれでも私を不安にした。彼等の議論は決して私を説きふせなかつたけれど、

ど、私を動搖させた。私はよい答辯を得なかつたけれど、必ずそれを得なければならぬと思つた。私は自分の誤謬よりも寧ろその無能を責めた。そして私の感情は、私の理性よりも勝つた答辯を彼等に與へた。

私は遂に思つた。私は自分より勝つた辯者の詭辯によつて、永久に愚弄されるであらうか、彼等が説明して熱心に他の人々に信せしめやうとする意見が果して彼等の意見であるか、何うかを確かめもしないで、自分を彼等の意のまゝに愚弄させて置くであらうかと。已の學説を支配する彼等の感情、このもの又はそのものを信じさせる彼等の興味は、到底彼等自身の信じたことを透察することが出来ない。彼等の學説には誠意がないのだ。彼等の哲學は他人に對する哲學である。

私には自分自身の哲學が必要である。尙ほ時日のある間に、全力を盡して之を搜らなければならない。これ一種の確實な規則を得て自分の残年を導くためである。今や私の充分に圓熟した時代で、凡ての智能の備はつた時代である。即ち私はもう衰凋を感じ初めた。若し私はこれ以上待つてゐるならばもう靜かに熟慮する凡ての力を失つてしまひ、その智能も既にその活動力を減じ、凡てのことは今日爲すよりも、劣つて來るであらうと思ふ。だから私はこの好時機を捉へなければならぬ。今や私の外部の物質的改革の時期であると共に、内部の精神的改革の時期である。誠意を以て自分の意見や、自分の主義を定めなければならない。そして私はよく考へた後、正しい晩年を送らなければならないのだ。

私はこの計畫を徐々に實行した。そして幾度も遣り直したが、しかし自分の出来るだけの努力と注意とを傾注した。私は自分の残年の安心と、自分の運命とが、全くこれに依つて定まるといふことを痛切に感じた。私は最初、困惑と、艱難と反對と、迂曲と、暗昧との迷宮のうちにあることに氣付いた。この迷宮は私が二十度も棄てやうと努めて無益な詮索を斥け、多くの勞苦を要する主義を吟味するを止め、よく熟慮して普通の謹慎を規則として守つた後の状態に似てゐた。しかし私はこのやうな謹慎を知らなかつたので、之を守るのは不適當だと思つた。それでこの謹慎を私の案内者とすることは、舵や羅針盤をもたぬ船が、數々の海や嵐を横ぎつて、殆んど近づくことの出來ぬ燈臺の光を搜しもとめるやうなもの

で、私を何處の港にも導くことが出来なかつた。

私は固執した。私の一生中初めてこの勇氣を振り起したのだ。そして私は多く疑念を懐かないで、恐ろしい運命をぢつと忍ばなければならなかつた。この運命は、この時から私を取り圍み出したのだ。私は恐らく世の何人も未だ嘗て試みたことのないほど、最も熱誠に探究した後、初めて自分に必要な凡ての感情に基いて自分を決定した。若し自分の行爲の結果が、思つた通りに行かなかつたとしても、少なくとも、この過失は決して罪惡ではないと信ずる。蓋し私は之を擁護するため、全力を盡したからである。實際幼年時代の偏見と私の心の秘密の誓とは、私にとつて最も慰めとなる方面のみ私を導かなかつたと信ずる。自分の熱心に望むことを信じ

ないのは困難なことだ。誰か他人の判断を容れたり斥けたりする利害の念が、希望や恐怖に關する大部分の人々の確信を決定しないと疑ふことが出来やうぞ。私は自白する。この利害の念は私の判断を惑はした。しかし決して私の誠意を變じなかつた。これ私は凡ての事に付いて自ら欺くことを嫌つたからだ。若し凡てのことがこの人生の習慣を造つたとすれば、尙ほ時機を失はぬ間に又全く欺かれぬ間に、少なくとも自分のもつてゐる勝ぐれた部分を引き出すために、其の習慣を知ることが肝要であつた。しかし私の此の世の中で最も恐れたのは、この世の利得を樂むために自分の氣分によつて、自分の心の永久の運命を曝露することであつた。私はこの世の利得を、決して大きな價值あるものとは思はなかつた。

尙ほ私は自白する。私は自分を苦しめた一切の争論を、常に遠ざけなかつた。これ等の争論は、當今の哲學者が、幾度も私の耳に繰返したので、之を遠ざければ私が満足することが出来たのだ。しかし私は終に人智の達し難い事物の上に自分を歸結し、且つ不可解の秘密や異論の凡ての部分を見出して、疑問毎に最も勝ぐれて最も信すべき説を採用した。そして自分が辯解することの出来なかつた異論に妨げられるやうなことはなかつた。しかし其の異論は、それと同様に力強い異論によつて辯駁された。これ等の事物に關する獨斷説を承認するのは、ただ野師ばかりである。しかしそれに代はる説をもつことが肝要だ。そして及ぶ限り最も秀でた判断を以てその説を選定しなければならぬ。若しそれでも誤謬に陥る

ならば、それは自分の罪でないから、良心に耻づるところがない。これが根柢から自分に安心を與へる確乎不拔な私の主義、私の原理である。

私の苦痛の多い探究の結果は、殆んど爾來「牧師の信仰の告白」のうちに記して置いた。この著書は、現代の人々から、非常な侮辱と迫害を受けたが、しかし例令これは彼等に良心と誠意とを回復させることが出来ぬとしても、何時かは彼等の間に革命を起させるであらうと思ふ。

これ以來私は、こんなにかしい、こんなに熟慮した瞑想の後に、受け入れたこれ等の主義を懐いて、心の平和を得、これを自分の行爲と信仰との不變の標準となした。それで私はもう自分が解くことの出来ぬ異論にも、又は自分の豫想する

ことの出来ぬ異論、即ち断えず新しく心に現はれて来る異論にも、煩らはされぬやうになつた。これ等の異論は、時として自分を不安にしたけれど、決して自分を動揺せしめなかつた。私は常に自分に云つた。これは皆形而上學的な巧言や、煩瑣論に過ぎないので、自分の理性が採用して、感情が確證した根本原理、即ち感情の絨獸のうちに心靈の同意の印章を帯びた根本原理に比較すれば、何の價値もないものであると。人間の智能に比して、そんなに勝つた事物に關して、私の解くことの出来ぬ異論が、こんなに堅固な、こんなに能く結束された、そして多くの熟慮と注意とを以て形造られた、こんなによく私の理性や感情や自身に適合して、心靈の同意によつて強固にされた超凡な卓絶した原理を何うして覆へすこ

とが出来やうぞ。自分の不滅の本性とこの世の組織、自分の支配し得る有形な秩序との間に適合があるので此の適合は決して空漠な議論のために破られるものではない。私はこの有形の秩序に符合する無形の秩序のうちに、自分の生活の不幸を耐へ忍ぶに必要な支柱のあることを見出した。これ私の探究して得た説である。私がこの説を棄てて他の説を懐くならば、何の手段もなく無意義に生きて、何の希望もなく無意義に死ななければならぬ。これでは動物よりも私は、遙に不幸である。と云はなければならぬ。それで機運や迫害者などには頓着をせず、自分を幸福するに充分なこの説を固守すべきである。この説、この原理のみ獨り幸福に導くのである。

この結論を得たのは、私に未來の運命を耐へ忍ばせるため

に、天の定めたものではなからうか。自分が期待した恐ろしい苦悶のうちに、又自分の残年を送るために定めた異常な地位にゐたならば、私は何うなつたであらうか。即ち和らげ難い迫害者を免れる避難處もなく、この世で受けた耻辱を雪ぐこともなく、自分の正義を現はす望もなく、地上に於ける最も戦慄すべき運命に陥つたならば、私は何うなつてゐたであらう。そして又今後何うなつたであらう。私は少しの邪念もなく、平和な心を懐きながら、人々が自分に尊敬や慈愛の念をもつてゐたと想像してゐた間に、私の公明な信じ易い心が、友達や兄弟と肝膽を吐露してゐた間に、背信者等は潜にその鍛へた網から地獄のどん底に自分を押しつけた。最も思ひがけない不幸と、尊大な人には餘りに恐るべきものとに驚かさ

れ、理由もなく汚辱を受け、侮蔑の淵のなかに沈められ、たい兇悪なもの満ちてゐた恐ろしい暗黒に囲まれたので、私は初めて愕然として驚倒したのだ。そして若し私が最初にこの陥穽から自分を救ひ出すために努力しなつたならば、不意に起つたこのやうな不幸から、逆でも免れることが出来なかつたであらうと思ふ。

私が氣力を回復して覺醒し、自分といふものを見出し、艱難に對して用ゐた策略の價値を覺えたのは、多年の間苦惱した後であつた。決斷すべきものは悉く決斷し、自分の格言を自分の地位に對照して、私は人々の不合理な意見と、この短い生涯の小さな出來事とに、從來未だないほど重大な意義を與へたことを悟つた。この生涯は艱苦の一つの状態に外なら

ないので、その艱苦は運命によつて豫め定められたものであつた以上、その種類の如何は毫も問ふところでなく、その艱苦が大きいければ大きいほど、強ければ強いほど、増せは増すほど、これを堪へ忍ぶことを知るのが利益であつたのだ。どんなに激しい苦痛でも、それが慥に立派に償はれるといふことを知つた人には、その報告の力が消え失せるものである。この賠償を確めることの出来たのは、主として私が以前の瞑想から遠ざかつた結果であつた。

到る處から集つて來た數限りもない凌辱や、輕蔑の最中に、不安と疑惑とが入り込んで來て、斷えず私の希望を動かしたり、私の安心を脅かした。私の解くことの出来ぬ強大な異論はこの時非常な力で私の心に現はれて來た。これが丁度私が

自分の運命の重荷を背負ふて意氣沮喪せんとする瞬間に、全く私を倒さんために現はれたのだ。それに私の立さはつた新しい議論は、屢々心に現はれて來て、既に自分を苦しめた議論の助太刀をした。嗚呼その時、私は窒息するやうな憂悶に堪へかねて自分に云つた。若しこの戦慄すべき運命のうちにあつて、自分の理性が與へて呉れた慰藉の中に、たゞ迷誤のみを見、自分の事業は破壊され、艱難の際に自分を導いた希望と安心との凡ての支柱が覆されたならば、誰か私を絶望から救ふて呉れるであらうかと。この世で獨り私にのみ空望を懐かせる幻影の外、私を助けるものはなかつた。現代の凡ての人々は、私のもつてゐた意見から、たゞ誤謬と偏見とのみを見出し、私と反對な學說からは、眞理と實證とのみを見出

すのだ。彼等はたゞ、私が誠意でその意見を採用してゐるといふことだけを信じてゐる。全く自分の意志を棄てても、それには越えることの出来ない、いろ／＼の困難がある。この困難を到底自分は解くことが不可能であるが、自分がそれを固執しても差支ないのである。然らば私はこれ等の人々の間にあつて、自分獨り聰明で、自分獨り鑑識があるのか。物事がこのやうである、といふことを信ずるためには、その物事が自分の氣に入ればそれで足りるのか。彼等以外の人の眼には、毫も確實に見えないもの、よしや私の感情が理性を是認しないにもせよ、自分には空幻に見えたものを、私はあからさまに信ずることが出来やうか。迫害者の打撃を押しつけやうとせず、その打撃の餌食となり、自分の迷誤のうちに留

まつてゐるよりも、彼等の格言を採用し、彼等と同じ武器を持つて、彼等と戦ふのは遙に勝れてゐたではないか、私は自分を聰明だとは思はない。私は欺かれる人に外ならない。無益な誤謬の犠牲者や、殉難者である。

疑惑と不安とに驅られたこんな場合に、私は幾度絶望の淵に沈まうとしたか。若し一ヶ月もこんな状態で過ごしたとすればもう身の破滅となつたのだ。しかしこの危機が、例令以前は屢々襲ひ來つたにせよ、常に長く續かなかつた。そして私が尙ほ全く氣力を落さなかつた當時は、襲ひ來ることが稀で、且つ忽ちにその危機が去つたので、私の安寧を脅かす力すらもたなかつた。丁度河のなかに落ちた羽毛が、その水の流を變へることが出来ぬと同様な、軽い不安を私の心

に與へるのみであつた。私は以前に決定した問題を、再び考へたが、之によつて當時自分が探究したときよりも、眞理に對するもつと勝ぐれた熱心、即ちもつと發達した意見や、新しい識見をもたなければならなかつたと感じた。こんな場合に私は氣力の旺盛な能力の圓熟した時代に、自分の靜かな生活がたい眞理を知らうとする強い興味より外もたない時代に最もよく反省もし吟味もした後に採用した意見を棄てて、確實な理性をもちながら、絶望の積み重なつたなかで、自分の不幸ばかりを論ずる意見を選び取ることが出来なかつた。私の感情が不幸に狭められ、私の心は倦怠に苦しめられ、私の想像は脅かされ、その頭腦は周圍の多くの恐るべき秘密に煩はされた今日、即ちその凡ての能力が老衰と苦悶とに弱めら

れて全くその氣力を失つた今日、自分が嘗て利用した凡ての手段を何うして喜こんで棄てることが出来やうぞ。そしてわけもなく受ける不幸を償ふために、充實した旺盛な自分の理性を信任しないで、何うして無法にも自分を不幸ならしめるために、自分の衰へかかつた理性を信任することが出来やうぞ。私はこの大きな疑問を決した時よりも聰明にもならなければ、勉學もしないし、又勝ぐれた信仰をもつてゐる譯でもない。私は今日自分を煩はす争論を、その時知らないのではない。その争論は私を妨げなかつた。そして若し又人々の氣付かなかつた新しい争論が現はれても、それは煩瑣な形而上學の僻説である。凡ての時代、凡ての智者や、凡ての國民に承認され、取り去ることの出来ない性格として、人間の心に

刻み付けられた不朽の眞理は、こんな僻説のために動かされるものではない。私はこれ等のことを瞑想して、人間の智能はその感覺のために制限され、充分に在りのままに、それ等のことを了解することが出来ないことを知た。故に私は了解し難かつた説には關係しないで、自分の了解し得た説を取つたのだ。この説は合理的であつた。私は以前に之を奉じたのだが、しかも之は自分の感情と理性との承認を得たのであつた。之に多くの有勢な主旨を結び付けなければならぬ今日、私は何んな理由によつて之を棄てるか。之に従へば何んな危険があるか。之を棄てれば何んな利益があるか。迫害者の説を採用すれば、その道徳をも亦採用するののか。根も實もないこの道徳、その感情や理性に於ける何物も觸れることなく、

書籍や演劇上の所作で、花々しく誇示する道徳、彼等に歸依した人々の心の教たるこの秘密な慘酷な道徳、他人にはたゞ虚飾の用をしかなきないで、獨り彼等の行爲の際にのみ役に立つ道徳、そして巧みに私を攻撃するために利用した道徳、この道徳は全く攻撃用のもので防禦の役には立たない。そして侵略の際にのみ必要である。彼等に陥れられた地位にゐる私にとつて、そんな道徳が何うして役に立たうぞ。私獨り無辜であればこそ、種々な不幸に遭遇したのだ。この二つとない有力な術策の代りに、邪悪を用ゐたとしても、尙ほこれ以上に不幸になることがあるまい。傷害の術でも講じたらそんな不幸を與へることが出来るであらうか。私がそんな不幸を與へることが出来るも、これに依つて自分の不幸が慰められる

か。私は自尊の念を失つて、その代りに何物をも得ることが出来まい。

私はよく推理してみても、逆上するやうな議論や、解し難い異論や、私の知り得なかつた、恐らく人の心の知り得なかつた争論のために、もう私の主義原理を動かされぬやうになつた。私は未だ嘗てなかつたほど、確實な地位に留まつて、自ら良心の避難所に安んずるやうに慣れたので、古い又は新しい何んな異説のためにも、鳥渡の間なりとも、私の安心を動かされたり、脅かされたりすることがない。私は精神の倦怠と衰弱とのために、自分の信仰と格言との基礎となつた推理をこれまで忘れてゐたのだ。しかし私は自分の良心と理性との許を得て、その推理から引き出した結論をば忘れないでゐ

た。そして爾來その結論を守つてゐる。凡ての哲學者は如何に之を妄評しても、彼等はただ時間を失つて徒らに無駄骨折りをするばかりである。私は今後、どんな手段を施しても、此の結論を守る。この結論、即ち私の主義學説は、今よりもつとよく選擇し得る場合に採用したものであつたのだ。

私はこんな体裁で平和を得たが、喜ばしいことには、自分の境遇に必要な希望と慰藉とを、そのうちに見出した。これから得た静寂は、完全な終始變らない着實な静寂に外ならない。現代の凡ての人々の斷えず過敏な、斷えず働く怨恨や、常に自分に加へる侮辱やは、時として私を失望させることもあるし、尙ほ時々私の希望を脅やかしたり、失望の疑惑が現はれて私の心を煩はし、悲しい思をさせたりすることがある。

こんな時には自分を安堵させるに必要な、心の動作も出来ない。私は古い計畫を喚び返さなければならぬ。この計畫を用ゐるために、役に立てた心配や、注意や、心の誠實や、此時私の記憶に再び現はれて来て、全く私に安心を與へる。私はこのやうにして慎むべき誤謬を斥けると同時に、凡ての新しい意見を斥ける。新しい意見は虚偽の現象に過ぎないから、私の安寧を脅かす材料となるのみである。

このやうに私は、古い知識の狭い區域に立籠つて、ソロンのやうに、日毎に老いゆきつつ學び得る幸福をもたない。そしてこの後、自分のよく知ることの出来ないものを學ぼうとする、危険な自負を起さないやうに自分を保護しなければならぬ。しかし私が有益な聖賢に近づき得る望みが少なくな

つても、自分の地位に必要な有徳者に近づくことが肝甚である。私の心は自ら得た知識で自分を富ませ、自分を飾るのは此の時である。私が心を妨げ、心を味まし此の身を脱離してあからさまに眞理を見、現代の偽學者が誇る凡ての知識の淺ましいことを知る時は、こんな知識を得やうとして失つた時日を惜み嘆くであらうと思ふ。しかし忍耐や、快樂や、天運に安ずることや、廉潔や、公平な正義やは、一種の財産であつて、斷えず自らを富まし、死にすらその價を奪はれる恐れがない。私は晩年をこの比類のない有益な研究に献げるのである。自分自身に關する研究が進んだために、私はこの世に生れたときより勝ぐれることが出来なくとも、遙に道徳的になつて、この世を脱離するに慣れたのは、實に幸福ではないか。

四

ブルタークの愛讀——少年時代の虚言——虚言の研究——眞實の解釋——嘘の種類——モンテスキウの小説——誠實な人——若い娘の間——二十年以上隠くした秘密——非行と德行——學問には年齢がない

私の時々讀んだ少數の書籍のうち、ブルタークの著書が一番氣に入つてゐる。そして一番役に立つ。この本は、私が幼年時代の最初の讀物であつたが、恐らく亦私が老年時代の最

後の讀物であらう。讀んで私に多少でも利益を與へるのは、獨りこの著作家ばかりだ。私は近頃彼が道德上の著書のうちにある「仇敵利用論」と題する本を讀んだ。この日私はさまざまな著作家から寄贈された若干の小冊子を取揃へてゐたが、不圖ロワイユ和尚の日記のうちの、「vitam vero impendentem」といふ文句を表題としたものに眼が留まつた。私は多くの作家の云ひ現はし方をよく考へてゐるので、その云ひ現はし方については容易に見誤らない。この本の云ひ現はし方は丁寧ではあつたが、甚だ不合理なことを云つてゐるやうであつた。しかし何んな理由に基づくのか、何の爲めにそんな諷刺をしたのか、私は何んな主旨をそれに與へたのか。私は今勝ぐれたブルタークの教訓を役に立てるために、虚言といふことに

ついで自分を吟味してみやうと思つた。そして私はデルハイの廟にある「汝自身を知れ」なる格言は、「懺悔録」中にいつたやうに、そんなに容易く行ふことが出来ないと固く信じた。翌日私はこの考を行つてみることにしたが、最初に頭に浮んだのは、少年時代にいつた恐ろしい虚言のことであつた。私はこの虚言を思ひ出して、いつも自分を苦しめてゐた。そして既に他のいろ／＼なことに惱まされた私の心は、老年になつてからもこの虚言のために尙ほ憂鬱になつた。この虚言そのものは、既に一つの大きな罪惡であつたが、それから起つた多くの出来事のために、更にもつと大きな罪惡となつたのだ。私はこの虚言のために起つた出来事を知らないが、その出来事は頗る慘酷なものであつたらうと思つて悔恨してゐた。

しかしその當時の私の意向の如何は暫く措いて、この虚言は惡むべき恥辱から起つたのであつた。私はこの虚言で、他を害はらなごといふ心が微盡もなかつた。この押へ難い恥辱が私の心を激動した瞬間に、その虚言の責を自分一人で負ふためには、喜んで生命をすら棄てたであらうといふことを、私は神明に誓ふことが出来る。私はこの虚言をいふ刹那、生來臆病の念が、心の凡ての要求を征服したためだといふより外に説明のしやうがない一種の失神状態にゐたのだ。

この不幸な行ひの思出や、その行ひのために生れた打ち消し難い悔恨の念やは、虚言といふことに對して一つの恐怖を起させ、その後私に再びこんな悪いことをさせないやうにした。私は自分の格言を選んだ時に、その格言にふさはしい行

ひを爲したと思つた。そして私がロツイウ和尚の言をもつと眞面目に吟味した時、自分がその言にふさはしくはなかつたかを疑つた。

その時私は一層注意を拂つて自分を研究し、餘りに多くの偽の物事を見出して驚いた。私は眞實を愛する自負の念から、未だ嘗て例のないやうな公平の心で、眞實のために自分の安寧や、利害や身体をも犠牲とした時代にも、これ等の物事を眞實らしくいつてゐたことを思ひ出した。

一番私の驚いたのは、こんな偽の物事を思ひだして、少しも悔む心の起らなかつたことだ。虚偽を恐れる念を心から取り除くことの出来ない私が、一つの虚言で避けることが出来る苦痛を、そのまゝ忍ぶ私が、必要もなく益もないのに、濫

りにそんな偽をいふたのは實に奇体な矛盾ではないか。一度虚言を吐いたとて、五十年間もそれを悔み恐れてゐた私が、少しも之がために悔恨を感じなかつたのは、實に不思議な自家撞着ではないか。私は決してこの過失を耐へ忍ぶことが出来なかつた。道徳心は常に私をよく導いた。私の良心は常に正しかつた。例令良心が利害の念によつて動かされても、情慾に強いられて、少なくとも其の欠點を辯解し得る場合には方正を保ちながら、何うして良心が其の欠點を辯解し得ない無關係な物事には特に方正を失はれやうぞ。私はこの問題の解決から、この點に關して自身に當てはめた意見の正しいことを悟つた。そしてよく吟味した後で、どんな風に自分を説明することが出来たかが解るのだ。

虚言即ち嘘とは人の云ひ現はすべき眞實即ち誠を隠くすことだ、といふことを、私が或る哲學書で讀んだことがある。云ひ現はす必要のない眞實を隠くすことは虚言でないとのこの解釋は、よく世間で信じられてゐる。しかし眞實を云ひ現はさないことに満足しないで、これと反對に解釋する人は、虚言をはいたのか、虚言をはかないのか。この解釋によれば人は虚言をはくことより外に知らないことになる。金を借りない人に、偽造した金を與へるのは、疑ひもなくその人を欺くのだが、盗むのではない。

こゝに頗る大切な二つの疑問が出て來た。第一の疑問は、人は常に眞實を云ひ現はさなくともよいなら何時、何うして眞實を他の人に云ひ現はすのか、といふので、第二の疑問は

人は悪い氣がなくて他の人を欺く場合があるか、といふのだ。この第二の疑問は極めて明白で、私はよく之に答へることが出来る。書籍の上では、第二の疑問に對しては否定的に、人は惡意がなくて他を欺く場合が無いと答へる。則ち書籍の上では、何んなに嚴格な道德を唱へても、著者に何の損がないからだ。亦社會上では、この疑問に對して、肯定的に、人は惡意がなくて他を欺く場合があると答へる。則ち實際の社會では、書籍上の道德などは一種の贅言に過ぎないので、之を實地に行ふことが出来ないからだ。さらばこんな自家撞着な説を棄てて、自分の説に従つて、自分のためにこれ等の疑問を解決してみやう。

普遍的抽象的な眞實は、凡ての善のうちで最も高價なもの

である。人は眞實を持たなければ盲目である。眞實は理性の眼である。人が自ら處するにも、人の人たる道を踏み行ふにも爲すべきことを爲すにも、自分の誠の目的に達するにも、皆この眞實の力をからなければならぬ。しかし特殊な個々の眞實は、何時も善ではない。特殊の眞實は時として惡となることがあるし、全く善惡に關係のないものとなることも往々ある。人の知らなければならぬこと、即ち自分の幸福のために必ず知らなければならぬことは、恐らくそんなに多いものではない。しかしその中の若干は善であつて、之を見出した人は到る處にそれを要求する権利がある。そして最も悪い盜賊にでも托さなければ、之を奪ひ取ることが出来ない。これは凡ての人々に共通の善で、之を他に傳へてもその持主

はそれを奪はれることがないからである。

教訓にも實用にもならぬ眞實は、毫も善ではないのだから、到底善たる價があるまい。財産の基礎は利用にあるのだから、利用することの出来ぬものは財産ではない。少なくとも其の土地に住んでゐる以上は、何んなに不毛の地でも、それが財産である。しかし凡てに無關係で、人に何の用もない無益なことは、その眞偽の如何に拘はらず、財産とはいへない。道徳上の規則には、物質上の規則と同じく、無用のものは一つもない。何ものにも益のないものは、之を持たなくとも差支がない。物事に價の生ずるのは、これを利用することが出来るからである。それで價值のある眞實とは、正義を増す眞實である。有つても無くとも關係のない、知つても何の益もな

い無用物を眞實と呼ぶのは、眞實の神聖な名を汚すものである。こんな微盡も利用のならぬ眞實は價のないもので、人は必ずしも之に従ふに及ばない。それでこの眞實即ち誠を隠くしても、又は他のもののやうに云ひ現はしても嘘とはいへない、虚言ではない。

しかし何の點から見ても、全く何ものにてても無益な眞實といふものが、あるか否かは別問題であるから、追々之を論ずることにする。今は先づ第二の疑問に移らう。

眞であることを云はぬことと、偽であることを云ふことは、甚だしく異つてゐるが、しかし同一の結果を齎すことが出来る。この結果が無意義であつても、この論結は確によいからである。眞實の無關係な處には、これと反對な誤謬も同

じく無關係である。それでこんな場合には、眞實と反對なことをいつて欺く人は、眞實をいはないで欺く人と同様に不正であるといはれなくなる。蓋し無益な眞實を誤るのは、それを知らないのと同様に悪いとは云へないからである。海の底にある沙が白いか又は赤いかを信ずることは、その砂が何んな色かを知らないと同じく私に關係のないことだ。不正といふことは、他に損害を與へたときにのみ成り立つのであるから、何うして人に害も加へないで、不正だと呼ぶるゝ譯はあらうぞ。

しかし、こんなに簡略に解決された、これ等の疑問を、あらゆる場合に正しく適用しやうとするには、必ず豫め多くの辨明をしなければならぬ。このやうにしなければ之を確實

に適用する事が出来ない。先づ利益がある場合にのみ眞實を云はなければならぬなら、私は何うしてこの利益の有無を判断する事が出来やうぞ。往々一の事業の利益は、他の事業の損害となる事がある。個人の利害は殆んど常に公衆の利害と相反してゐる。こんな場合に、何うして自ら處することが出来やうぞ。自分の前にゐる人の利益のために、自分の前にゐない人の利益を犠牲に供さなければならぬか。甲には益があるけれど、乙には害になる眞實を隠してよいのか云つてよいのか。特に公衆の善のためにいなければならぬのか。又は特に個々人の正義のためにいなければならぬのか。知識を公平に分つためにのみ、ものの凡ての關係を知らなければならぬのか。加之他に對して爲なければならぬ

ことばかりを吟味しても、自分自身に對して爲なければならぬことを充分に吟味したのか。眞實そのものに對して爲なければならぬことを充分に吟味したのか。若しも他を欺いても、他に何の損害をも與へなかつたならば、私は自身に損害を與へないことになるのか。不正なことすら爲なければ、それで何時も罪のない清淨な人となる事が出来るのか。

この類はしい議論から免れるには、次のやうにいなければならぬ。あらゆるものを棄てても、常に眞實なれ。正義そのものは、物事の眞實のうちにある。虚言即ち嘘は何時でも不正である。誤謬は爲すべきこと、又は信すべきことの規則の代りとする時は、常に瞞着である。眞實から出た或る結果は、自分から出たのでないから、之をいつても常に罪には

ならない。

しかしこの疑問の解決は、これだけにして畧することにする。常に眞實をいふことは善いことにしても、常に必ず同様にいはなければならなかつたので、私はそれをいふことに留意しなかつた。そして眞實を隠くしたり、他のもののやうに云つたりしても、不正にも虚言にもならない場合は、實際に存在してゐるから、こんな場合を精確に眞實をいはなければならぬ場合から、區別することをしなかつた。それでこれ等の場合を知つて、よくこれを定めるために、一つの確かな規則をもとめなければならぬ。

しかし何處からこの規則を引き出すか。何うしてその規則の確實なことを證據だてるか、……こんな困難な道德上の凡

ての疑問を、私は理性の光よりも、寧ろ良心の自覺によつて解くを常とした。道德的本能は決して私を欺かなかつた。道德的本能はこれまで、私の身を任せても差支がないほど純潔であつた。私の行爲に關して、此の本能は時として感情の爲すままに任せて置くことがあつても、私の記憶では全く感情を支配する。恐らく死後に於ける神の裁判のやうに、嚴格に自分を裁判するのは、實にこの記憶である。

その結果に依つて、人々の言葉を判断すると、屢々悪く評價することがある。その結果が常に知り難いといふよりも、寧ろその言葉を生んだ境遇のやうに、限りなくその結果が變化する。しかしその言葉を評價してその善惡の程度を定めるのは専らその言葉を懐く人の意向である。偽をいつても、欺

く意向がなくていつたのなら虚言ではない。この欺く意向は常に他を害ふためではなくて、時としてそれと反対な目的をもつてゐることがある。だが虚言が罪にならないやうにするには、他を害ふ意向を現はさないだけでは充分でない。その虚言のために他の陥つた誤謬が、少しも何人をも害ふことが出来ないとの證據がなければならぬ。この證據を得ることは稀であつて、困難なことである。それで虚言を吐いても全く罪にならないことは稀であつて、困難なことである。自分の利益のために自分自身に虚言を吐くことは、欺瞞である、他人の利益のために嘘をつくことは詐偽である。他人を害ふために虚言をはくことは、讒謗であつて、一番悪い虚言である。それで虚言を吐いても、自分や他の利益にも損害にもな

らないときは、虚言を吐いたと咥いへない。これは虚言ではない。これは小説である。

道徳上の目的をもつてゐる小説を寓話又は寓言と稱する。

寓話の目的が、心地よく感動し易い形式の下に、有要な眞實を包むのであるから、こんな場合には、少しも虚言を隠くさなくともよい。虚言は眞實の衣に外ならないのだ。寓話のためにはのみ寓話を語る人は、決して虚言者ではない。

一つの眞實の教訓をも含まない他の小説は、全く無益である。物語や小説の大部分は、概ねこれに屬する。これ等はたゞ娛樂を目的とするに過ぎない。全く道徳上益のないこれ等の小説は、たゞ之を創作する人の意向に依つてのみ評價することが出来る。この作家が、實際の眞實として眞面目に小説

を作る時、實際の虚言から出たのでない限りは、之を斥けることが出来ない。しかし是れまで、この虚言をひどく掛念したものはあるか。この虚言を書いた作家を真面目に批難したものがあるか。例令ばモンテスキウの「愛神の廟」に、或る道徳上の目的があるとするとするも、この目的は淫逸な記事や、放蕩な影像のために、いたく妨げられたり、汚されたりしてゐる。この作家は謹慎といふ一種の漆で、之を塗り隠くしはしなかつた。この作物は希臘の稿本を翻譯したといふのは偽りだ。彼は自分の物語を眞實だと讀者に思はせるに最も適當な方法で、この稿本を見出した由來を書いたのだ。これが實際の虚言でないならば、何故これを虚言だといふか。しかしこの作家をして此の虚言の罪を作らせたものは誰であるか。欺

瞞者として彼を遇するに至らしめたものは誰であるか。

これは一種の諧謔に外ならないとか、作家は全く人を説き伏せやうとしなかつたとか、實際説き伏せはしなかつたとか、その作物は希臘人の書いたものを翻譯したのだといふことを、一般の人々が鳥渡も疑はなかつたとか、いふけれど無駄なことである。私は思ふにこんな何の目的もない諧謔は、頗る愚かな兒戯に過ぎないのだ。慥に何人をも説き伏せる考がなく虚言を吐くとしても、虚言は矢張り虚言である。教育のある人々から、質朴な、信じ易い多くの人々を引き離さなければならぬ。眞摯な作家が、誠意を装ふて其の稿本の由來を語つたのは、質朴な信じ易い人々を本當に欺いたのだ。これ等の人々は古形の盃で、恐れもなく毒を飲んだのだ。作家

が若しこの毒を新形の瓶に入れて差出したならば、彼等は少なくともそれを飲むことを躊躇したらうと思ふ。

これ等の辨別は、良心の働きのたしかな人ばかりでなく、誠意ある凡ての人々の心にあるのであつて、書籍にあるのではない。自分の利益のために偽りをいふのは、他を害するたために偽りをいふと同じく、虚言を吐くのである。假令罪が軽くとも、虚言といふ點には變りがないのだ。利益を得る資格のないものに利益を與へるのは、正義の秩序を亂すものである。自分又は他に對して、毀譽褒貶を起こすやうな行ひを、偽つてなすのは不正の行ひである。何んな手段でも、眞實に背き、正義を破ることは、凡て虚言である。こゝに虚言と虚言でないこととの正確な限界があるのだ。しかし何んな方法

でも、眞實に背いても、正義を害はぬものは小説に外ならない。例令私は純粹の小説を虚言として批難しても、良心は自分よりも一層鋭敏であるといふことを自白する。

人が好意から出た虚言と呼ぶのも、實際の虚言である。即ち自分又は他に利益を與へやうと欺くのは、害を與へやうと欺くと同様に不正であるからだ。眞實に背いて、褒めたり、貶したりする人は、それが實際の人に關係してゐる以上は、虚言を吐いたのだ。もしそれが人に關係しないで、架空のものに關係してゐるならば、云ひたいことをいつても虚言にはならない。しかしこの場合には、その創作した物事の善惡から判断したり、偽つて判断したりしてはならない。實際虚言を吐かないにしても、その物事の善惡から判断すると、それ

より百倍も貴い本當の眞實に背いて虚言を吐くことになるからである。

これ等の誤つた判断をする人々が、この世で誠實だと呼ばれてゐる。彼等の誠實は悉くその無益な會話で盡きてしまつてゐる。彼等は毫も想像を加へることを許さないし、その境遇を飾ることも、誇張することをもしないで、たゞ場所や時日や人物を、精密に示さうとしてゐる。自分の趣味に觸れないことでも、毫も取捨しないで最も精密に物語つてゐる。しかし若し自分に關係あることを取扱ふ場合、自分に近くにあることを物語る場合には、あらゆる色彩を用ゐて、最も自分に利益あるやうに之を云ひ現はすのである。そして若し虚言が自分に益があつても、自分では虚言を吐かないで、作中の

人物にいはせ、虚言を吐く責任を負はなくともよいやうな風に虚言を吐くのである。このやうに謹慎を装ふて、而かも虚言をはくのだ。こんな誠實は遠ざけなければならぬ。

私の誠實だと呼ぶ人は、これとは全く反對である。全然無關係な物事について、他の人が深くそれを尊ぶ時には、自分は餘り深くそれに觸はらないやうにする。そして有つても無くなつても差支ない、偽りの物事で、友を樂ませることには少しも躑躅しない。しかし正義と眞實とに反して、何人かに利益とか損害とか、毀譽とか褒貶とかを與へる虚言は、決して其の心にも浮ばなければ、其の口からも筆からも出て來ない。自分の利益に背いても、例令無益な會話で少し位は飾つても、慥に誠實である。人を欺かうとしなければ誠實である。

眞實を尊ばないものを責むるほど、眞實に忠實であれば誠實である。自分の利益のためにも、敵を害するためにも、決して欺かないのが誠實である。私のいふ誠實の人と、他の誠實の人との區別を述べてみれば、世間でいふ誠實の人は、自分に損のゆかない場合は、頗る眞面目に眞實に従ふけれど、自分に損のゆく場合は眞實に従はないが、私のいふ誠實の人は眞實のために身を犠牲に供すべき時の如く、眞面目に眞實に従ふのである。

しかし人或は云はん。私の所謂誠實な人は、眞實に對してこんな熱烈な愛をもちながら、その愛の弛むことのあるのは何のためか、そしてこの愛には多くの混合物があるから、偽りの愛ではないかと。いや決してそんなことはない。この愛

は、まじりのない本當の愛である。しかしこの愛は、正義を愛する念から生れたのであるが、例令時として荒唐に見えても、決して偽ることを欲しない。正義と眞實とは、彼の心に於ては同一である。異名同義語であつて、正義といふ語の代りに、眞實といふ語を用ゐても、又眞實といふ語の代りに、正義といふ語を用ゐても、更に頓着がない。しかし彼の尊ぶ純潔な本當の眞實は、無關係な事柄や、無益な名の上に在るのではなく、實際自分のものとして責を負はされる物事、即ち善惡の誣告や、毀譽褒貶の報償の上に在るのだ。彼は公平であるから、他を詐らない。又良心をもつてゐるから、不正に他や自分を害はふとはしない。そして自分に近づかないものに、近づかうとはしない。彼の猜忌深いのは、特にその自

尊心に基づくのである。これは少なくとも棄てることの出来る善行である。そしてこの善行を棄てて他の尊敬を得るも、實際の損失を感じる。彼はそれで何の掛念もなく、虚言をいふとも思はないで、時として無関係な物事について虚言をはくことがあるが、他や自分を償ふためや、利するためには決して虚言を吐かない。歴史上の眞實を維持することや、人の品行や、正義や、友誼や、有益な智見を論ずることに於て彼は誤謬に陥らないやうに注意する。嘗に自分ばかりでなく、他の人々をも自分同様に誤謬に陥らないやうにする。彼に従へばこれ以外の凡ての虚言は虚言ではないのだ。「愛神の廟」が若し有益な作物であるとすれば、希臘の稿本に關する物語は頗る無邪氣な一つの小説に過ぎないが、若し又その作物が

有害だとすれば、この物語は頗る罪深い虚言である。

これが虚言と眞實、即ち嘘と誠とを辨別する良心の規則であつた。私の感情は機械的にこの規則に従つてゐた。私の理性はその後この規則を受け容れ、道德的本能が之を役に立てたのだ。不遇なマリヨンが陥つたやうな虚言のために、私は拭ひ去ることの出来ない悔恨を腦裡に刻みつけた。それがために私は、これから後、嘗にこのやうな種類の虚言ばかりでなく少しでも他の利害や、名聞に觸れるやうな凡ての虚言を決していはないやうにした。かやうな禁制を押し廣めて、私は利益や損害を嚴重に計つたり、有害な虚言と好意の虚言との正確な限界を定めることをしなかつた。私はその孰れをも共に罪すべき虚言と看做し、雙方を禁じて、虚言と名のつく

ものは、決して之をいはぬことにした。

これがために、私の氣質は、自分の格言や、また寧ろ習慣に少なくない影響を興へた。私はこれまで規則に依つて動かすに、即ち凡ての物事について規則を守らずに、自分の天性の衝動に依つて動いてゐたからであつた。前以て虚言を吐かうなどとの考は、決して自分の胸に浮ばなかつた。私は決して自分の利益のために虚言を吐かなかつた。しかし私は無關係な物事又は僅に自分のみに關係ある物事に惱まされなために、虚言を吐いたのが恥辱であつた。これは私の考が遅緩で、會話に乏しかつたのに、何かいはふと思つて、強いて小説などを書いた場合であつた。必ずいはなければならぬ時にそれに當てはまる面白い眞實が、咄嗟の間に心に浮ばない

ので、そのまま黙つてゐたくないから寓言を書くのである。しかしこの寓言を作り出すにも、出来るだけ注意をして、虚言にならぬやうにした。謂はゞこの寓言が、正義も眞實をも破らないし、又世間の何人にも自分にも、全く關係のない小説に過ぎないのだ。私は少なくとも、物事の眞實を、道徳上の眞實と取代へることを望む。則ち人間の心に於ける自然の感情をいひ現はし、且つ常に有益な教訓を引き出さうとするのだ。一言で之をいへば道徳的物語や教訓談を作することを望むのだ。しかしこれ等の寓言や小説を有益なものとなし、教訓の資料たらしめるには、もつと心が落着いてゐなければならぬし、もつと會話が上手で、自分のいひたいことが、すらくと淀みなくいへるやうでなければならぬのだ。私の

會談の早さは、自分の考の早さより遙に速かで、殆んど考が胸に浮ぶ前に口の先きから外に出てしまう。それで言葉が外に出てしまつてから、氣が付いて、何故そんな馬鹿な間違つたことを云つたかと、自分で自分を責めることが度々あつた。私はよく判断する前に、これを調らべてみて改めることが、もう出来なかつたのだ。

思ひがけない咄嗟の場合に、恥辱と臆病とのために氣もそゝろになつて、時として心にもない虚言をいふのは、この最初に起る制し難い衝動のためである。よく考へる前に、何うしてもその瞬間、即座に答へなければならぬ必要に迫るからである。私に深い感銘を與へた薄命なマリヨンのことを回憶すると何時も、他を害ふやうな虚言から遠ざかることが出

来る。自分一人に關した煩ひを避けやうとて云ふ虚言でなく、他の運命に影響するやうな虚言は、私の良心や主義に反してゐるのだ。

若し虚言を取消して眞實をいつても、新に恥辱を受けなかつたならば、私は全力を盡してそれを爲したに相違ないと茲に斷言する。しかしこんな事をするのは恥辱であるから、尙ほそれが出来ないのだ。私は自分の行ひを改めないけれど、心の底からしみじみ自分の過失を悔いてゐる。次の一例は私のいはうと思ふことを、よく説明してゐる。これで私が利益や利己心や、又は嫉妬や悪意のためには、決して虚言を吐かないことを示してゐる。しかし私は虚言といふものを理解し、毫も自分に役に立たないといふことをよくよく悟つたから、

困惑した場合や、甚だしい恥辱となる場合でなければ、決して虚言をはかない。

暫く以前のことであるが、F氏は私の妻やB氏とともに、遊散といふ風で、料理店の主婦某の家に、晝飯を食べに行くことを私と約束した。こんなことは、私にとつて是れまでにないことだ。私等は主婦と、その二人の娘と一所になつて、晝飯を食べた。その時、近頃結婚した肥え太とつた姉娘が、だしぬけに、私に子供があるかと尋ねた。私は眼まで赤くして、子供をもたないことを答へた。その娘は、一座の人々を見ながら、くすくす笑つた。何のためにそんなことを尋ねたのか、笑ふたのか、一向合點がゆかなかつた。

例令僞る氣があつたにせよ、この答は私のいはうとした答

でないことは解りきつてゐる。客人のゐたこの場合自分がかう答へても、子があるかないかについてその人々の考に少しも變りがないことを、私はよく知つてゐた。彼女は私がかう答へるだらうと思ひまうけてゐた。私に嘘をつかせて黽らうとさへしたのだ。私はそれに氣が付かないほど愚鈍ではなかつた。二分間ばかりたつと、自分のいふべき答が、彼女の口から出た。「若い女の身で、年とつた獨身のお方に、こんなお尋ねをしたのは、少し不躰でした」。かういつたので、僞りもしないし、何をいつても顔を赤らめもしないで、私は一座の人々を自分の味方にした。私は彼女に向つて、私にそんなことを尋ねても、無禮でも何でもないといった。私はこんなことをいつて何にもならなかつた。いふべきことをばいはい

で、何の役にもたさないことをいつた。私の答は自分の判断にも自分の意志にも依らないで、困惑したために機械的に出て来たのだ。以前には、私はこんなに困惑などしなかつた。恥辱といふよりも、寧ろ信實の念から悉く自分の過失を自白した。これは私が、この過失を償つたことを、人が知つてゐたと思つたからだ。そして自分の心の内を悟つたからだ。しかし悪意を懐いてゐる人の眼は、私を苦しめ、私を惱ました。私は不幸になればなるほど臆病になつた。私の虚言をくくのは實に臆病だからであつた。

私は「懺悔録」を書いた時のやうに、もう虚言を嫌はなかつた。それは虚言をいふ傾向が少なくなつたのに、その誘惑は強く數多くなつたからだ。しかし私は殆んど解し難い心持

のために、自分の爲すべきことをそのまま黙つてゐたり、隠くしたりしないで、それと反對の氣分で虚言をいつたことを覺えた。この場合ごく寛やかに自分を云ひわけなごしないで、寧ろ酷く厳しく自分を責めた。そして自分で自分を裁判するよりは、もつと寛やかに他から裁判せられる日があるであらうと思つて、自分の良心を慰めてゐた。さうだ、私は意氣昂然として自分の考をいふ。この書には、少なくとも他の何人にも劣らない、誠意や眞實や公明やを含んでゐるのだ。自分の行ふた善は、その惡よりも勝ぐれてゐたと思ふから、私は自分の利害を悉くいはうとした。そしてそれを悉くいつてしまつた。

私は在りのまゝいつた。物事に制せられてゐなく、事情に

制せられて屢々いつた。こんな虚言は、意志の作用ではなくて、寧ろ想像の迷ひから起つたのだ。それは虚言ではないからそれを虚言と呼ぶのは誤りであつたと思ふ。私は人生の表面ばかりを見た。私は人生をも足らなく感じた。私はもう此の人生の儂ない歡樂のために老い、その歡樂を厭ふ心から懺悔録を書いた。それは記憶から書いたのだ。私の記憶は不完全で、物事を思ひ出せないことが度々ある。それで細々しい事柄で、どうしても思ひ出せないところは想像で補ふた。しかしその想像は決して事實に反したやうなものではなかつた。私は生涯に於ける幸福な時期を追憶することを好んだ。私は時としてこの時期を飾るに、優しい悔恨から來る種々の事柄を以てした。私は忘れた物事を、實際さうであつたやう

にいつた。自分の記憶に叶うやうに、及ぶ限り眞實だと思はれるやうにいつた。私は本當に他の面白いことを附け加へたけれど、自分の非を庇ふためや、自分の徳を誇るために虚言を吐かなかつた。

私は時として、何の氣もなく、自分の側面を飾つて、醜い方面を隠したけれど、これよりも勝ぐれたことで充分之を償ふてゐた。私が物事を隠していはなかつたけれど、私は屢々自分の悪いことよりも、自分の善いことを、一層氣を付けて押し隠して置いた。これは私の一つの特性で、疑ひ深き人でも、之を許さなければならぬ。私は凡ての野鄙な非行のことを度々いつた。しかし愛すべき善行のことは殆んど何にもいはなかつた。餘りに自分を褒め上げるやうに當るから

屢々全く黙つてゐた。私は懺悔録を書きながら、自分の讃辭を書いたやうな氣がした位だ。私は青年時代のことを書いても、決して自分の秀でた特性のことなどを誇らなかつた。寧ろこの特性を餘りにあからさまに現はすやうな事柄をば除き取つた。私はこの特性を示すに足る少年時代に於ける二つの出来事を思ひ出して、之を書き留めやうとしたが、次ぎにいふやうな特別な理由で、双方ともに棄ててしまつた。

私は殆んど毎日曜を、バアクイのフアズイ氏の家に過さした。この人は私の叔母の夫で、印度更紗の工場を其處にもつてゐた。或る日私は、布に光澤を付ける機械室内の乾燥場にゐて、鑄鐵の數々の棒を見てゐた。それは光つて中々面白かつたので、私は指を掛けずにはゐられなくなつた。この時フ

アズイの息子は車輪の内に身を置いて、頗る巧みにその二分の一ばかり廻はつた。私も面白まぎれに圓筒の横木に指を掛けてそれを動かした。私はたゞ二本の指先きを掛けたばかりだが、忽ちその指先きが押し潰ぶされて、二つの爪が取れてしまつた。私は驚いてけたたましく聲を上げて泣いた。フアズイはその刹那、直ぐに輪を逆に廻はしたが、矢張り爪は圓筒から離れなかつた。そして私の指から、血がだら／＼流れて來た。フアズイは驚いて自ら叫んで、私を抱いた。そして大變なことが出来るから、何卒そんなに泣いて呉れるなど願つた。私は悲しかつたが、彼の悲みに心を動かされて、泣くのをやめた。彼は私の指を洗つてくれて、そしてその血を乾かしてくれた。彼は涙を流して、何卒この事を他に知らせな

いでくれと願つた。私は彼の願を聞きとゞけ、それから二十年以上もこの約束を守つた。それで何のために二つの指先きを怪我したのか、誰も知らないのだ。指の傷は今も尙ほ残つてゐて、自分がその約束を破ることを留めてゐる。私は三週間以上も床に就いてゐたばかりでなく、二個月以上も手を使ふことが出来なかつた。そして大きな石に落ちられて、指先きを潰したと、何時も他にいつてゐた。虚言と云へば虚言であるが、實に氣高い虚言であつた。

しかし此の出来事は、場合が場合であつたから、深く自分の心を動かしたのであつた。それはその時、郊外で戦さごつこをして、運動をする場合であつたからだ。それは同じ年頃の他の三人の少年と列を作り、軍服を着て、近傍の一隊を率ゐ

て戦をしなければならなかつたのだ。三人の友が、その一隊とともに、太鼓を打ちながら、私の家の窓の下を通つたが、床に寝てゐて、私が太鼓の音を聴くのは實に悲しかつた。

もう一つの出来事も、これと全く似寄つてゐるが、もつと年をとつてからのことだ。

私はフランスと呼ぶ友達とともに、ブラン・パレエで球戯をして遊んでゐた。私等はその遊戯のことで喧嘩をして、互になぐり合つた。その時彼は球戯の棒で、何もかぶらない私の素頭を強く打つた。餘りに力任せに打つたので、私の脳味噌が飛び出はしないかと思ふ位であつた。私は打たれた途端に、ば、た、りと地の上に倒れた。私は未だ嘗て一度も、その餓兒のやうに昂奮したものを見たことがない。私の頭から瀑の

やうに血が流れて來るのが見えた。私はもう殺されたと思つた。彼は急に身を屈めて、私を抱きかかへた。そして涙を流し、聲を立てて激しく泣きながら、強く私を抱きしめた。私も又彼のやうに泣きながら、力かぎり抱き付いた。或る淡い悲哀のまじつた一種の混雜した感情に驅られたのであつた。血は斷えず流れてゐたので、彼は兎に角それを留めなければならなかつた。私等の二枚の手巾では、迎てもその血を押し留めることが出來ないと思つたので、彼は自分の家に私をつれて行つた。その家は其處の近くにある小さい庭のある家であつた。彼のお人よしな母は、私のそんな有様を見たので、いたく氣分を悪くしたやうであつたが、それでも私をよく縋帶してくるだけのことは出來た。則ち彼女は私の傷をよく

ぬらしてから、ブランデイの中に浸した百合の花をつけてくれた。私の國のはうでは、さうの昔に廢たつてしまつたが、これは傷にはよくきく藥である。彼女の涙と、その息子の涙とは、深く私に感動を與へたので、長い間自分の母とも兄弟とも思つてゐた。月日のたつにつれて、この親子から遠ざかつて、今や追々忘れるやうになつた。

私は前の出來事と同様に、この出來事を秘密にしてゐた。懺悔録のうちに書かなかつたが、このやうな種類の出來事は私の生涯の間に百度もあつた。これは自分の性格に基づく德行だと思つたが、これを仰々しく書き立てるやうな手段をとらなかつた。私が自分の知つてゐた事柄と反對なことをいふたにしても、それは無關係な事柄であつたからだ。自分の利

害からでもなく、又他の利害からでもなく、寧ろそれをいひ現はす煩はしさや、それを書く喜ばしさからだ。私のした自白は、もつと大きな非行、いふてもさほどの恥にならない非行の自白よりも、遙に謙遜な、遙に苦しい自白である。そして私は自分が行つたことだけのことを自白したのである。これ等のことは、懺悔録を公平に讀んだものの誰でも感ずるところであらうと思ふ。

自分の行つたことを眞實に自白したのは、その物事が實際に在つたためよりも、寧ろ誠實や公平の感念のためであつた。そして私は實際書き立てる場合には、眞偽の抽象的觀念よりも、寧ろ一層自分の良心の指揮に従つた。私は往々寓言を可なり書いたが、虚言は殆んど稀であつた。こんな具合で、私

は自分に關する多くの手掛りを他に與へたが、決して誤りではなかつた。私は自分に相當しない、過分な利益を得やうとはしなかつた。これは特に眞實は徳行だと思つてゐるからである。他の方面から見れば、眞實は形而上學的のものに過ぎないので、善をも惡をも生まないものである。

しかし私は自分に全く責任がないと信ずるために、こんな區別では充分心を満足させることが出來ない。私は他に對する責任をよく吟味したとしても、自分自身に對する責任を充分吟味したか何うか。他に對して正しくなければならぬとすれば、自分に對しても又正しくなければならぬ。これ正直な人が、自分の品位に對して捧げなければならぬ一種の献物である。自分が會話が下手だからとて、その代りに無邪

氣な寓言を用ゐたのは誤りであつた。他を喜ばせるために、自分を賤しくしてはならないからである。書くのが楽しみだといふので、實際の事柄の外に、種々の飾りを想ひ出して附け加へたのは、もつと大きな誤りであつた。寓言で眞實を飾るのは、實際眞實を汚すからである。

しかし私がこの格言を選んだのは、更にもつと大きな誤りで、殆んど言ひ譯けの言葉がない位だ。この格言は甚だしく私を強いて、到るところ私の興味や、嗜好を犠牲に供したばかりでなく、又私の柔弱や、生れつきの怯懦をも犠牲に供した。且つ凡ての場合、常に眞實なるべき勇氣と力をもたなければならなかつた。そして口や筆から決して小説も寓言をも出さないほど、特に眞實を嚴守しなければならなかつた。

私はこの尊大な格言を用ゐたので、これだけのことは是非いつて置かなければならなかつたし、又自分が強いてこれを用ゐた以上は、断えず繰り返へして置かなければならなかつた。決して虚偽が私に虚言をいはせたのではない。私のいつた虚言は、悉く自分の柔弱に基づいたので、これだけは一番に言ひ譯がしがたい。心が弱くとも、どうかかうか非行から遠ざかることが出来るが、勝ぐれた徳行を自白するといふことは、倨傲な大膽なことである。

ロワイウ和尚の暗示を受けなかつたならば、恐らく私はこのやうに自己を反省するといふことがなかつたかも知れない。このやうに自己を省みることを平素の習慣とするには、疑もなく可なり遅いのである。しかし私の誤謬を改め、この意志

を整へるためには、決して遅そ過ぎるとはいへない。私は今後この反省に、全力を盡さうとするのみならず、反省は私の爲すべきことの全部であるからである。そこで、このことやこれと同様な凡てのことに於て、ソロンの格言は、あらゆる年齢に適用することが出来る。そして聰明となり、誠實となり、謙讓となるために學ぶことや、又少なくとも自分を知るには、決して遅そ過ぎるといふことはない。これは常に自分ばかりではなく、その敵のことについてすら同一である。

五

風光明媚なサン・ピエル島——最も幸福な生活——楽しい草花の採取——快かな午後の運動——兎の飼養——湖水に浮べた小舟——瞑想の快樂——羽化登仙の思——心の避難所

私のこれまで住んでゐた居所、私の面白いと思つた居所が數あるけれど、ピエヌ湖の真中にあるサン・ピエル島のやうに、私を本當に幸福にした處はなかつた。それで私が其處から他に立ち去るときには、いひやうのない心地よい遺憾の念に胸をそそられたのだ。この小さな島は、ニウシャテル市の人々

から、ラ・モット島と呼ばれて、瑞西ですら知る人が甚だ少ない。私の知つてゐる旅行者は、一人としてこの島の名を語らない。しかし他と交はることを好まない人が、心ゆくばかりな生活をするには、實にお誂え向きな位置にあつて、頗る氣持のよいところである。私の行先きの運命が既に定まつて、恐らくこの世の中に一人法師となつてしまつたが、この島のやうな處を喜ぶ天賦の嗜好をもつてゐるものは、例令これまでそんな人には遭はないにしても、決して自分獨りではあるまいと思ふ。

ピエヌ湖の河川は、ゼネエヅ湖の河川よりは、もつと素樸で、もつとロマンチックである。そして岩石や樹木は、もつと近く流に沿ふてゐる。しかしこの岩や樹の風致のよいこ

とは、決してそれに劣つてゐない。耕野や葡萄畑が少ないだけ、町や家が少ないだけ、それだけ天然の緑草や、牧場や、樹立に蔽はれた場所が多く、見慣れないものや、思ひがけないことが澤山ある。この心地のよい島には、馬車の通るやうな、便利な廣い立派な路がないので、旅人に訪づられることは稀である。しかし恣のままに天然の美に酔ふて、靜かに瞑想することを好む考深い世捨人にとっては、頗る愉快な處だ。この静けさを妨げるものとしては、鷺の叫びや、時を距てて囀る小鳥の聲や、峰から流れ落つる瀑の音ばかりである。麗はしい盆のやうに圓い湖の中に、二つの小さな島があつて、その一つは周圍半里ばかりで、人家もあれば耕地もあるが、他の一つは、餘程面積も狭く荒れ寂びてゐる。この小さな方

の島は、浪や嵐から受ける損害を修繕するために、断えず土を運ばれるので、遂にこんなに荒れ寂びたのであらう。このやうにして弱いものは何時でも、強いもののために利用されるのである。

この大きな島には、唯だ一軒の家があるきりであつた。これはベルン市の慈恵病院のもので、氣持のよい、便利な大きな家で、一人の税務官が、その家族や僕婢とともに住んでゐた。そこには、種々の家畜の飼養場や、鳥類の飼育所や、若干の養魚場があつた。この島は小さいけれど、その地形が頗る變化に富んでゐて、殆んどあらゆる風景が備はり、何んな耕作にも適するやうになつてゐた。種々な野や、葡萄畑や林や、果樹園や、藪に蔽はれて、さまざまな小枝に飾られた、

豊沃な牧場があつて、側を流れる河のために何時もそれが青々と鮮やかになつてゐた。二列に植ゑた樹のある一つの高地は、長く島の岸を取り圍んでゐた。そしてこの高地の真中に一軒の綺麗な建物があつた。葡萄の收穫期になると、附近の岸に住んでゐる人々が、この建物に集つて踊を踊るのだ。

モチエルの迫害を受けた後、私の避難したのは、實にこの島であつた。此處の滞在が、ひどく愉快であつたので、自分の思ひどほりな生活をなした。それで私は一生を此の島に送らうと決心したが、これは英國で思ひ付いたこととは別なもので、たゞ此處に長くゐられるか何うかといふことだけを心配した。かう心配しながら、私はこの避難所を永久の牢獄にしてもらひ、一生此處に閉ぢ込められて、凡ての權勢や、此處

を出たいとの希望やを遠ざけてもらひ、全く大陸との交通を断つてしまひ、世の中の一切のことを忘れてしまひ、そして此處にゐる自分のことをも亦忘れてもらひたいと思つた。

私はこの島に僅か二個月より居ることが出来なかつた。しかし私はたゞ暫しの間も友に煩はされることもなく、二年でも、二世紀でも、又は永久でも此處にゐたいと思つた。私は交はる友とては、税務官とその妻と、その僕婢ばかりであつたが、これ等の人々は、いづれも頗る善い人であつた。税務官も屹度私と交はるのを喜こんだのだ。この島に送つた二個月は、一生のうち一番幸福な時で、亦未だ嘗て経験したことのないほど幸福であつた。それで私はたゞの一分間も、不平や不満を懐くやうなことがなかつた。

さらば何れほど幸福であつたか。その幸福の快樂とは何んなものであつたか。私はその島の生活を述べて、この時代の人々の推測に任せることにする。私は快樂の凡ての甘味を味はうとしたが、その最も勝ぐれた快樂は其の主なる賜物であつた。そして私が此の島に滞在中に爲したことは皆實に閑散を貪る人に必要な楽しい仕事に外ならなかつた。

自分が好んで行つたこの島からは、誰かの助けを得るか、好都合なことがなければ、出ることが出来ないし、周囲にゐる人々の力をからなければ、交通することも、手紙の遣り取りも出来ないのだが、私は寂しい此處に何時までも隠遁してゐたいと望んだ。この望は未だ嘗て経験したことのないほど静かに今後月日を送ることが出来るとの望を起させた。そし

て其處で、凡てのことをよく整へる暇があると思つたので、何事をも整へないで旅をした。何の用意も整へないで、獨り取急いで此の島に渡つたが、女中や、私の書籍や、小さな行李をその後直ぐに取寄せた。その書籍や行李は、解くのも億劫であつたので、届いたままに棄てて置いて、丁度翌日出立すると思つて、宿屋にでも泊つたときのやうに、自分の住まふと定めた家にゐた。しかしそれでも、凡てこれ等のものは頗る綺麗に整へられて、少しの手落ちもなくよく取揃ふた。私は好きなことが數あるが、書籍を何時もきちん^ちと箱に入れて置くことが、とりわけて好きであつた。そして文具箱などを持つのが嫌ひであつた。若し厭やな手紙でも來て、已むを得ずその返事でも書かなければならなかつた時は、不承無承

に税務官の文具箱を借りた。そして二度とそれを借りたくな
いと思つて、急いでそれを返へした。しかし亦度々それを借
りなければならぬことが起きた。厭やな書類や、古びた書籍
などの代りに、私は種々な花や、乾草を自分の部屋一ぱいに
置いた。これは當時私が熱心に植物學を研究し初めた時であ
つたからだ。私はイヅエルノアの博士に勧められて、植物學
に興味をもつやうになつたのだが、その後私は間もなく非常
に植物が好きになつたのだ。私は勞作のいる仕事を望まなか
つたが、自分を喜ばせる一の娛樂、懶け者でも爲てみやうと
思ふやうな苦痛のない仕事が必要であつた。私は植物の採取
をして、島の植物を一つも落ちなく、自分の晩年を悉く費や
すに足るほど精細に、書き留めてみやうと企てた。或る英人

が、拘縁の實の一枚の外皮を研究して、一冊の本を書いたといふことだが、私も牧場の茅や、木の苔や、岩を蔽ふ蘚について、それ／＼一冊の本を書くことが出来たと思ふ。私は草に生えてゐる一本の刺毛や、植物の何んな微分子をも残らず精しく書き留めて置きたいと思つた。それでこの心地よい企を實行するために、毎朝、食事の後、手に凸鏡を携へ、腕の下に植物學書を抱へ、自分が豫め此の目的のために、小さな多くの方形に分けて置いた場所を訪ふた。私は何時でも、この方形の地を一つ一つに廻ぐつた。植物の構造や組織や、又はそれまで知らなかつた植物の生殖作用やについて、實際に自分が觀察する毎に、眞に例へやうのない無上の歡喜を覺えた。植物一般の特質の區別などは、是れまで一向知らなかつ

たが、それを共通な種類のものについて、親しく實驗するのが頗る自分の好奇心をそゝつた。こんな實驗をする機會が容易にあるものでないと思つたから、その樂みは尙ほ深かつた。夏枯草の長い二つの雄蕊の枝分點や、苧麻、繁縷の雄蕊の彈力性や、鳳仙花の實と、黃揚樹の子房との破裂や、數限りない小さな生殖作用やを、私は生れて初めて實際に見たので、愉快でたまらなかつた。そして丁度ラフオンテエヌが、ハバキユスを読んだものがあるかと尋ねたやうに、私も夏枯草の角を見たものがあるかと尋ねた。二三時間の後に、私は澤山の材料を得て歸ることが出来た。雨のために外に出られない時は、家にゐて晝食後この材料を研究して楽しむのであつた。午前の餘暇には、稅務官とともに、その妻やテレエズをつれ

て、彼の雇ふて置いた耕作人を尋ね、往々自ら働いてその收穫を手傳つた。私は亦果物を一ぱいに入れた袋を腰につけて高い樹の上に昇り、その袋を綱で地の上に下したりなごした。こんな有様を、尋ねて来た人々に見られたことも度々あつた。午前の運動と、その運動にもとづく心持のよい気分とのために、私は極めて愉快に晝食の休息を食ふことが出来た。しかし休息が延び過ぎたり、天氣が好かつたりする際は、私は長くじつとして待つてゐることが出来ないで、他の人がまだ食卓に向つてゐた時でも、巧みにその場を遁げ出して、獨り小舟に乗つた。水の静かなときは、湖のまん中までも漕ぎ出し、眼を空に向けて舟のなかに長々と身を延ばして、さまざま楽しい瞑想に耽けながら、時としては數時間も、水のま

に／＼寛るやかに漂ふた。その瞑想には、しつかりした定まつた目的とはなかつたが、自分の經驗した最も心地よい快樂よりも、百層倍もまさつて樂しかつた。私は夕日の西に沈むのに氣が付いて我れに返つて、力一ぱいに舟を漕がなければ、日暮れ前に岸に着くことが出来ないほど、島から遠く離れてゐることが度々あつた。又或る時は、湖の沖に漕ぎ出さないで、草木の影を宿として綠色となつた、島の數々の河岸を漕いで楽しむこともあつた。その河の水は透き通るやうに清らかで、所々新鮮な樹影があるので、そのなかで沐浴することも珍らしくなかつた。しかし私は亦度々大きな島から小さな島に舟を漕ぎ寄せ、其處に上陸して、或は鼠季くろめさきや蓼たぐや、その他種々な草木のなかを暫らく逍遙したり、或は芝草や藥

草や、いろ／＼の花や、牧草や、以前植ゑたことがあつたとの噂ある苜蓿やに蔽はれた、砂の多い丘の上に立つたりして、午後を過ごしたこともあつた。この丘は最も兎が棲むにふさはしいので、何の害も受けず、何の恐れもなく、平和に繁殖させることが出来ると思つた。そこでこの思ひ付きを税務官に話して、ニウシヤアテルから雌雄二匹の兎を取寄せ、その妻や、妻の妹や、テレエズや私などが、仰々しく團體を組んで、それを小さな島につれて行つた。私が島を去る前にもうその兎が段々繁殖し初めた。若し冬の寒さをすら凌ぐことが出来たならば、屹度益々繁殖してその子孫が榮えたと思ふ。兎を小さな島に養殖したのは祝ふべきことであつた。私が得意になつて、友達の一部や二匹の兎をつれて、大きな島

から小さな島に押し渡つたのは、アルゴノオトの水先案内者よりももつと偉いと思つた。そしてひどく水を恐れて、何時も氣分を悪くした税務官の妻が、全く私を信じて舟に乗り、水を横ざる間少しも心配な氣色を示さなかつたことは、私が大威張りで他に語つたところだ。

湖が荒れて、舟を漕ぐことが出来なかつたときには、島の彼方此方を彷徨ふて、私は植物の採取をしながら午後を過ごした。時として靜に瞑想するために、最も喜ばしい最も靜かな隱家に座つてゐたこともあつたし、亦家の前の臺の上や、丘の上に座つて、湖やその岸邊の絶佳な風景に見とれたこともあつた。湖の一方は程近い山岳に圍まれ、他方には豊沃な平野が廣がり、その奥のほうには、遙に遠く遠く蒼い山々が見

えた。

夕暮が近づくとき私は島の高い處から、砂のある湖の岸に降りて、何かの蔭によく座つたりした。波の音と水の激する響とは、私の動揺した心を鎮め、楽しい瞑想に耽けらせ、夜になつたことにすら氣付かないで、驚くことが度々あつた。湖水の動揺や、その斷續して聞える音は、又たえまなく私の耳や目を打つて、瞑想のために沈んだ心を醒まし、殊更ら考へることもなく自分の生存を、しみじみ、楽しく感じさせるに充分であつた。この世の物事は、その湖水の表面に映つる影のやうで、常に變動し易いものだとの考が、何にとはなしに不圖頭に浮ぶことも少なくなかつた。しかしこんな淡い考は、私をよぼるやうな、水の斷え間ない音律のうちに消えてしまつた。

そして私はこの水の音律のために酔ふたやうになつて、餘ほを努力しなければ、眞面目に物事を考へることが出来ないこともあつた。

晚餐後、夜がよければ、私は他の人々と一しよに、家の前の臺の上を逍遙して、湖水から吹いて來る空氣と、清冷な夜氣を呼吸した。人々は思ひ／＼に天幕のなかに休んだり、笑つたり、話をしたり、意味の解らない古い歌などを唄つたりした。それが濟むと、その日一日の事に満足して寢床に入つた。そして翌日もこのやうにして日を送らうと思ふ外、何事をも望まなかつた。

私がこの島に滞在してゐた時は、こんな風にして月日を送つてゐた。時として思ひがけない人が訪づねて來たり、又厭

やな來客にも會はなければならなかつた。私は今、當時のこ
とを人に話されても、頗る活々とした優しい強い追恨の念が胸
にこみあげて来て、その愛すべき住居を思ひ出すと何時でも
尙ほ、力強い希望が湧いて来て、限りない喜びを覺えるので
ある。

最も優しい喜びと、最も活々した樂みとに充ちてゐる時期
は、過去の出來事を追憶して樂む時期ではないといふことを
私は變化の多い長い生活で實例を示した。この興奮した短い
時間は、例へ活々してゐても、生の稀薄な部分に外ならない
ので、一の境遇を形造るには餘りに稀で、餘りに早や過ぎる。
私がこの島にゐて經驗したこの幸福は、消え易い瞬間から成
り立つたのではなく、一種の單純な、變らない境遇である。

活々してはゐないけれど、永久に變らないので、益々樂みが
加はり、終には無上の幸福を齎らすのである。

この地上に於ける凡てのものは斷え間なく變遷してゐる。
不變な、固定なものは一つもない。外面の物事に依つて起る
私等の感情も、必ずやその物事に應じて移動もすれば變化も
する。私等の前に、又は後に、何時でもこの感情は、現在か
ら消えた過去を思ひ出したり、まだ在りもせぬ未來を思つた
りする。この地上には、心を専らにすることの出来るほど、
確實なものは、一つもない。それで人はこの世で、消え易い
快樂のほかもつことが出來ない。變らない幸福といふものは
この世にあるとは思はれない。私等の最も深く喜ぶ時ですら、
その喜びの時間が常に續くであらうかと、心の底から本當に

自らいふことは殆んど出来まい。私等の心に尙ほ不安や空虚やらを残す變じ易い境遇、過去の何事をか惜んだり、未來の何事をか望んだりする境遇を、何うして幸福と呼ぶことが出来やうぞ。

しかし若しその境遇が、全く心身を安んずるに足る確實な場所で、過去を思ひ出したり、未來に憧がれたりする必要なく、時間に心を煩はされず、たゞ常に現在にのみ連続してゐるけれど、その連続などに注意せず、自己の生存といふ感念あるばかりで、艱難とか、喜悅とか、快樂とか、苦痛とか、希望とか、恐怖とかの感念が、全くないとすれば、こんな境遇を幸福だと呼ぶことが出来る。この幸福は世人がこの世に經驗するやうな、貧弱な不完全な、相對的な幸福ではなく、

心のうちに空虚を残さない、即ち物足りないと思はせることのない、完全無欠な充實した幸福である。私はサンビエル島にゐて、小舟に寝轉ろんで水のまにまに漂ひながら、或は荒れる湖の岸に座つて、或は又美しい川の邊りや、砂濱の土をさらさらと流れる小河の岸に腰を下ろして、獨り靜かな瞑想到に耽りながら、度々こんな幸福な境遇を經驗した。

外物と何の關係もない、自分自身や、自分の生存といふ外に何も思はない、こんな境遇にゐて、何が面白いのかといふに、この境遇が續く限り、人は神のやうに自分自身に満足する。全く他を思はないで、たゞ自分の生存のみを思ふ念は、満足と平和とを生む貴重な感念である。この感念は此の世で斷えず人を迷はせたり、快樂を脅かしたりする、肉慾的な賤

しい凡ての感覚から自分を遠ざけて、たゞ自分の生存を高尙な温雅なものとしやうとする。しかし人は概ね、断えまないさまざまな感情に刺戟されて、この幸福な境遇を味ふことが稀である。そして實際眞の樂を與へない、曖昧な混雜した感念のみをもつてゐるばかりである。現今の人々のやうに、たゞ甘き歡樂にのみ憧がれ、断えず起つて來る必要に驅られてその義務を守らなければならぬやうな、活動的生活を厭ふのはよいことではない。しかし人間社會から除かれた不遇者、この世に於て自分にも他にも何の福利をも與へることの出來ない薄倖者が、この境遇に於て、運命や人々が到底奪ふことの出來ない、限りない幸福を味ふて、これまでの不幸を悉く償ふことが出來る。

何んな人でも悉くこの償ひを感じ得る譯ではないし、又何んな地位に於ても悉くこの償ひを感じ得る譯ではない。この償ひを感じやうとするには、心が平和でなければならぬ。そして感情のために、其の静けさを脅かされるやうなことがあつてはならない。その心がこの償ひを感じ得るやうな状態になつてゐなければならぬ。周囲の物事がそれを助けるやうになつてゐなければならぬ。心が少しも動搖しないで、絶対に静平でなければならぬ譯ではないが、その心が秩序正しく適度に働いて、間斷や激動がなければよい。心の働きがなければ、人生は一種の昏睡に過ぎないことになる。若しその働きが不規則であつたり、又は強かつたりするのは、その心が醒めてゐるのだ。私等がその周囲の物事を思ひ出すと、

瞑想の樂みは破れる。そして私等の心のうちが脅やかされて暫し運命や人の鞭の下に身を任かせ、自分を不幸だと思ふのだ。絶對の緘黙は悲哀を生むものである。緘黙は死の一種の面影である。その時喜ばしい想像の助けを受けるのが必要だ。そしてその喜ばしい想像は天が賜はつたのだといふことを自然に自ら示すものである。外から來ない働きは、その時私等の内に現はれる。安靜は詰らないものではあるが、心の底が動搖しないで、淡い優しい考が、たゞその表面のみに軽く觸れる時には、最も心地よいものである。凡ての不幸をば忘れて、たゞ自分自身を思ひ出せば充分である。心が安靜ですらあれば、このやうな瞑想は、何處でも味ふことが出来る。私はバスタイルの牢獄を除くの外、到る處で度々考へた。そし

て一つとして眼に觸れるもののない獄裡に於てすら、私は尙ほ樂しく瞑想に耽けることが出来たであらうと思ふ。

この瞑想には、天然に浮世から離れた、静かな豊かな島が最も勝ぐれて、最も適してゐた。即ち心を悦ばせる風景ばかりで、悲しい過去を思ひ出させるものもなく、その住民は柔順で優しく、常に私を樂しませ、何の妨げも、何の心配もなく全く自分の好きな仕事に耽けて、悠々自適することの出来た島が、瞑想に一番適してゐた。多くの不快な物事に取まかれてゐながら、面白いことばかり考へて實際自分の感覺に觸れる凡ての事柄を、悠々味ふことの出来る瞑想者にとつて、當時の場合も亦疑ひなく好都合であつた。私は楽しい長い瞑想から醒めて、緑草や、花や、小鳥に圍まれながら、水晶の

やうな透明な水の漲ぎつてゐた、絶佳な河岸に遠く目を放つて、これ等の凡ての愛すべき物事を材料として心のうちに小説を空想してみた。そして遂には段々に空想からわれに返つたけれど、その空想と事實とのはつきりした區別がつかなくなつた。胸に描いた空想も周囲の美しい風景も、この麗しい島に於ける私の瞑想的な閑寂な生活を、同様に貴いものにしてやうと競ふてゐるやうであつた。

嗚呼何うして二度とこんな楽しい生活が出来きやうぞ。この愛らしい島から離れないで、迫害者が多年の間私を苦しめて快としたあらゆる艱苦を思ひ起させる大陸の人を二度と見ないで、嗚呼どうしてこの島に殘年を送ることが出来きやうぞ。彼等は幾程もなく永久に忘れられるであらうが、彼等は

決して私を忘れぬであらう。しかし私の安靜を妨げるために近づかなければ、それで何の關係があらうぞ。社會生活の雑沓を生む凡ての世俗的慾望を棄てたなら、私の心は屢々この俗寰の上に飛躍し、豫め天人のやうな聰明を得、短日月の間に智識を増すであらう。人々はこのやうに楽しい避難所を私に許すことを望まなかつたから、私にそれを與へないやうに注意するであらう。しかし彼等は少なくとも私が想像と呼ぶ心のうちの避難所で、日毎に自ら楽しむことや、既に経験した快樂を數時間味ふうことを妨げはしまし。私にとつて、一番楽しいことは、恣まに既往の快樂を瞑想することである。それを瞑想して、同一の快樂を味はうことが出来るかといふに私はもつと深い快樂を味はうことが出来る。私は單調な抽

象的な瞑想に加へるに、その瞑想を活かす楽しい影像を以てする。歎極つた時はこれ等の物事を感知しないことが度々あつた。今では私の瞑想は以前より一層深くなつて、それ等の楽しい物事を一層活々と描き出す。私は實際経験した時よりも尙ほ一層楽しく一層屢々それ等の物事を思ひ出す。不幸といふものは、想像が鈍ぶるにつれて、襲ひ來ることが少なくなり、そして以前のやうには長く續かなくなるものだ。人が最も妨げとなつた遺骸を棄て初めるのは、嗚呼實にこの時である。

六

跛足の少年——慈善の快樂——束縛の鎖——慈善の研究——多感
 多根の性質——時代の變化——艱難の偉力——運命の弄——宇宙
 一げいの生存——ツセエの指輪——人間の自由

何んな機械的な行動でも、概ねその原因が心のうちにあるのだから、その行動の原因を心のうちに探ぐらなければならぬ。こんなことは人がよく知つてゐることだ。

昨日私は、ラ・ビエエヴル河に沿ふて、ジャンチイ村の方から植物採取に行かうと思つて、新しい廣街を過ぎ、アンフェ

ルの柵に近寄つて右に曲がつた。それから其の村のなかを迂回し、フォンテエヌプロウ街道を辿つて、この小さな河の岸にある小山に登らうとしたのだ。私は何の譯もなく、この道筋を歩いたのだが、しかし幾度も幾度も、機械的に同じ廻り路をしたことを思ひ出して、何ういふ譯かと其の原因を心のうちで考へてみた。そして其の廻り路をした原因が解つたとき私は笑はないではゐられなかつた。

その廣街の隅にあるアンフェルの柵の端に、夏になると毎日、果物や麥酒や、小さな麵包を賣る一人の女がゐる。この女は素的に温なしい跛足の小さな男の子をもつてゐる。この子供は杖を撞いで跛足をひきながら、好んで通行者に哀れみを請ふて歩く。私はこの小さなお人好しの子を知つてゐた

たので、其處を通るたびに、何時でも近よつて來て挨拶をし、私から何か物を恵まれるのを例とした。初めのうちは、この子を見るのが面白かつたので、衷心から憐れと思ふて物を與へた。私はこんなことを幾度も繰り返へし、時としてはその子の話を聞いて喜こんだ。これが追々習慣となつて、何うした譯かは自分にも解らないが、この喜びは一種の義務の念に變じた。この義務の念は幾許もなく苦痛に變じた。これは就中その子から馴れ馴れしく話を聞かされたり、時としては自分と親しいといふことを示すために、ルツソオさんなどと呼ばれたりしたからであつた。即ちこれまで教育ある人々ばかりに知られてゐたからであつた。その後私は滅多に其處を通らなくなつた。そして終には、概ね前にいふたやうな廻り路

をする習慣が、機械的についてしまった。

私は是れまで、こんなことについて、判然と考へたことがないが、自ら顧みて始めて気が付いたのだ。私の行動の眞實な最初の動機は、概ね自分が長い間もくろんでゐたこと、やうに、明瞭でなかつたといふことがよく解かつた。私はこれについて、引續いて種々な他の行動を思ひ出した。私は善いことを爲すことは、人の心が味ふことが出来る幸福よりも、一層勝つた誠の幸福であると悟つた。しかし私は長い間の誠の幸福から遠ざけられた。そして私のやうな不幸な境遇にゐては、實際によい唯だ一つの行ひも、思ふままに爲すことが出来なかつた。迫害者等は、私にとつて凡てのものが、唯だ皆偽りに見えるやうに努めたので、善いことを爲さうと

する動機が、私を窶に引き入れるために示した一種の餌に過ぎなかつた。私はこのことを知つてゐた。その後私の力で爲すことの出来る唯一の善は、何の行ひもせず黙つてゐること、即ち善を爲さうとも、善を知らうともせず、悪いことを爲しはせぬかと恐れることだと、私は悟つた。

しかし私が心のまゝに、時々他の人に満足を與へることの出来た時は、最も幸福であつた。そして私は他に満足を與へた毎に、限らない喜びを覺えた。他に満足を與へやうとした嗜好、即ち善をしやうとした嗜好は、活々した眞實な純潔なものであつた。そして私の心の奥底では、決して何の偽りもなかつた。それに拘はらず、私は義務といふ鎖のために、屢々自分自身の爲した慈善の重さを感じた。この重さを感じた

時は、喜びの念が失せてしまつた。そして最初に私を樂ませたことも、幾度もくゞ繰返したので、終には殆んど耐へ難い一種の苦痛となつたのだ。私の幸福な時代は短かつたが、それでも多くの人々が種々のことを私に頼みに來た。自分に出来ることなれば、一々その頼みを聴きとどけてやつた。一としていひ通がれをしたことがなかつた。しかし心情を吐露して爲した、これ等の慈善から、自分の思ひがけなかつた、長い束縛の鎖が生れたのだ。そして自分はもう其の鞭から免れることが出来なかつた。私の最初の慈善は、その慈善を受けた人々の目には、後から後から引續いて慈善をさせる手附金に外ならなかつた。そして私は不幸にも、一度慈善のため、に籠絡されるや否や、その後引續いてその慈善を繰り返へし

のだ。この自由な任意な最初の慈善は、一種の不定な権利となつて、引續いて私に他の慈善を爲させた。自分がそれを爲す力がないといふても、その慈善を爲さない譯にはゆかなかつた。こんな具合で、頗る喜ばしい快樂も、私にとつて後には、不便な煩はしい服従に變じたのである。

それに拘はらず、私が世間から忘れられて、曖昧な生活をしてゐた時は、この義務の重さも、さほど重いとは思はなかつた。しかし私が、一度自分の作物によつて名高くなつた時から、貧困なものや、自ら貧困を装ふものや、詐偽を働かうとするものや、巧みな阿諛を口實としてさまざま手段で私から金品を得やうと付き纏ふものは、よい鳥が來たごばかりに、いろくゞなことを頼んで來た。まるで請願所の本部のや

うになつた。私が作物を出して名高くなつたのは、大きな過失ではあつたが、自分の不幸でその過失を償ふよりは優つてゐたと思ふ。わけもなく濫りに社會で現らはした慈善心や、その他凡ての生來の嗜好が、この時變つてしまつて、屢々有害なものとなつた。初めには有益であつたこれ等の嗜好も、後には變つて來て、往々有害なものとなつたのに私の氣付いたのは實にこの時であつた。慘酷な數々の經驗が、追々私の最初の嗜好を變じて、といふよりは寧ろその嗜好が、遂にその實際の限界のうちに閉ぢ込められたので、私は自分の嗜好に驅られて、盲目的に慈善を爲すやうなことは、成るべくしなくなつた。こんな慈善は、他の害になることが多いからであつた。

しかし私はこのやうな經驗を、決して憾みには思はなかつた。このやうな經驗は、よく考へてみると、自分自身や、迷ひ易いいろ／＼な場合に於ける、自分の行爲の誠の動機やを知らせる、新らし光となつたからであつた。喜こんで善いことをしやうとすれば、何の束縛もなく自由に行はなければならなかつたし、又善い行ひから起る凡ての喜びを除くためにはその行ひが自分にとつて一種の義務になれば、それで充分であつた、といふことを私は悟つた。この時から義務の重さは、最も楽しい喜悅の重荷となつた。そして私が「エミール」でいふたやうに輿論が義務を強いた時には、土耳其人の家で無能な夫であつたと思ふ。

善いことをすれば楽しみであつても、その嗜好に従つて善い

ことをしないのは、長い間懐いてゐた善に關する自分の意見が甚だしく變はつたからである。そして義務がその命ずるところをさせやうとしても、意見がその嗜好を征服して了ふ。私が世間の人々のやうに、多くのことをしないほうがよいと知つたのは、實に之れがためである。

私はお人好しで、多感で、弱いものを憐れみ、頗る仁慈を喜ぶ性質をもつて生れたので、慈悲や仁恵に富んで、その趣味や感情によつて動かされてゐた。もし私が最も權勢をもつてゐたならば、人間のうちで最も勝ぐれた、最も寛仁な人であつたと思ふ。そして私から復讐の念を除かうとするには、たゞ復讐することが出来るといふことだけで充分であつた。私は自分の利益に反對しても、別に苦痛をも感じないで、正

しくしてゐることが出来たと思ふ。しかし自分に親しい人々の利益に反對しては、正しくしてゐることが出来なかつたと思ふ。私の義務と感情とが衝突した場合に、自分の感情を抑へなければ、義務のはうの勝つのが稀であつた。その場合私は感情を押へつけて、義務に従ふやうな強い人間にならうとしたことも度々あつた。しかし自分の嗜好に反して行動することは、常に不可能であつた。私の感情も意志も黙つてゐる時に自分に行動を命ずるものが、人であらうが、義務であらうが、亦は必要そのものであらうが、私はそれに服従をしないのだ。自分を脅かす不幸を見れば、私はその不幸を早く來らせやうと努めないで、寧ろその不幸の來るのを待つてゐた。私は時々このやうに努力してみたが、その努力が長く續かな

いで、自分は忽ち疲れきつてしまふた。どんな物事でも私は喜こんで行はなければ、程なく行ふことが出来なくなる。

加之この束縛が、少しでも強過ぎれば私の望みに従つて、全然取り除くことも、又嫌ひならば變ずることも出来たが、私にとつては、他人の期待する善い行をすることが苦痛となつた。それで他人が期待しない時に、自分からそれを爲したのだ。何の報酬をも得やうとしない眞の慈善は、慥に自分の好きな行ひである。しかし慈善を受けた人が、憎まれてもよから、その慈善を續けてもらいたいために、何か稱號を拵へたり、最初に慈善をして喜びを得たために、何時までも長く慈善をしなければならぬ規則でも設けたりする時は、慈善をするのが苦痛となり、慈善の喜悅は自ら消えてしまふのだ。

私が讓歩して慈喜をするといふことは、無氣力な悲しむべき耻辱である。それで自分の意に背いて強いて慈善をすれば、自分を喜ばせることが出来ないで、反つて良心からとがめられることになる。

私は慈善者と被慈善者との間に、一種の約束があると思ふ。それは一般の人々が集合して出来た社會より、もつと狭い彼等相互に作つた社會のやうなものである。それで被慈善者は慈善者の善意を潜に感謝しやうと約束し、慈善者も亦体面を汚さない限りは、慈善を施こしたその善意を保つて、何時でも出来るだけ慈善を施こすことを約束する。これは正式な條件に基づくのではなく、彼等の間にかかる關係に基づく自然の結果である。他から慈善を頼まれて、初めてそれを斥ける人